

# 三河の昆虫

MIKAWA NO KONCHU No.64  
The Mikawa Insects Association



## ミナミオオヒゲコメツキ

*Oxynopterus audouini* (Hope, 1842)

コメツキムシとしては世界最大級のミナミオオヒゲコメツキの雄個体です。(写真左)

右の老熟幼虫は、フィリピンのセブ島の畑で、土中から掘り出されたものを(故)佐藤正孝博士がもらい受けたものです。(写真提供: 大平仁夫)

2017

三河昆虫研究会

# 三河の昆虫 No.64

三河昆虫研究会

The Mikawa Insects Association

## 目 次

大平 仁夫	渥美半島海岸沿いや三河湾島嶼で 周辺絶滅しているハマベオオヒメサビキコリについて	p.875 - 876
安藤 尚	愛知県のベニイトトンボの盛衰の記録	p.877 - 884
杉坂 美典	ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について (その2)	p.885 - 888
山崎 隆弘	ミドリカメノコハムシを作手にて採集	p.889 - 890
吉鶴 靖則	知多半島におけるミンミンゼミの記録の整理	p.891 - 894
吉鶴 靖則	モートンイトトンボの東海市における発生の可能性について	p.895 - 896
浅岡 孝知	愛知県田原市姫島の昆虫の記録(2016)	p.897 - 898
市川 靖浩	岡崎市で採集されたチャイロマメゲンゴロウの記録	p.899 - 900
市川 靖浩	豊田市における流水性ゲンゴロウ2種の記録	p.901 - 902
大曾根 剛	知立市産ツマキチョウの一変異型について	p.903
白井 和伸	奥三河のヤマキマダラヒカゲ	p.904
原田 究	岐阜県高山市高根町日和田で採集した昆虫	p.905
大場 裕一	中部大学蝶類研究資料館	p.906 - 907

### 短 報

山本 英治	ルイスホソカタムシの記録	p.888
小鹿 亨	2016年 西三河平野部アキアカネの記録	p.890
原田 究	段戸裏谷でオオシモフリスズメを記録	p.900
金田 吉高	岡崎市でルイスホソカタムシを採集	p.908

三河の昆虫 No.64 ISSN 0023-3218 2017年3月26日 三河昆虫研究会発行

・事務局 〒444-3511 愛知県岡崎市舞木町狐山6-4 大平仁夫方 ☎0564-48-4368

E-mail:mikawakonken@yahoo.co.jp (郵便00830-9-14465)

会長: 大平仁夫 副会長: 山崎隆弘 会計: 浅岡孝知

会誌編集委員: 浅岡孝知 市川靖浩 大場裕一 小鹿亨 杉坂美典 山崎隆弘

印刷:安城印刷(株) 〒446-0039 愛知県安城市花ノ木町5-2

## 渥美半島海岸沿いや三河湾島嶼で周辺絶滅している ハマベオオヒメサビキコリについて

大平 仁夫

ハマベオオヒメサビキコリ *Agrypnus (Colaulon) tsukamotoi* (Kishii,1956)の一般外形は、ヒメサビキコリ *Agrypnus (Colaulon) scrofa* (Candèze,1873)に類似した海浜沿いの砂礫や荒れ地に分布する海浜性の種である。一般外形がヒメサビキコリに類似しているため、これと混同されることもあるが、ハマベオオヒメは体がヒメサビキコリより大形で、後翅は図示したように短小化して、飛翔することはできない(図1)。ヒメサビキコリの後翅は通常の長さを有し、飛翔することは可能である。

愛知県に分布する *Colaulon* 亜属の種は3種いて、ヒメサビキコリの体長は7-8mm内外であるが、コガタヒメサビキコリの体長は6-7mmの長さでより小形である。ハマベオオヒメサビキコリの体長は7-8mmほどあってより大形であり、後翅は短小化して飛翔することはできないので、後翅の長さを調べれば両者は識別できる。また、コガタヒメサビキコリの体長は6mmほどで、前2種に比してもっとも小形であるし、上翅の条線と条線の間室は著しく皺状をしているので識別できるし、雄交尾期の形態では明瞭な差が見られる。また、前のハマベオオヒメは海岸沿い(島嶼ではやや内陸にも分布)しているが、ヒメサビは主として河川沿い河川敷に分布し、コガタヒメの方はより乾いた内陸の石下や畑に敷いたマットの下などに、雌雄が単独で見られることが多く、よく飛翔する。

これら3種で問題になるのは、渥美半島三河湾沿いの漁港周辺と湾内に点在する小島の港周辺に分布していたハマベオオヒメサビキコリの存在である。特に三河湾沿いは、渥美半島の内海湾沿いから豊橋から蒲郡の海岸線にかけての整備は進んでいて、往時の海岸線の面影はなくなっている。湾内に点在する島嶼も観光地化で賑わい整備が進んでいて、かつての景観は次第に失われている。湾内の島嶼で最も自然が残っていた佐久島などは、島内のあちこちに散在していた畑や雑木林や竹林も失われ、東部の学校近くにあった水田や湿地などは荒れ地になっている。湾内の島嶼で唯一の産地であったミドリシジミやシモフリコマツキ類も、すでに絶滅したのではないと思われる。

知多半島の海浜性の昆虫としてハマベオオヒメサビキコリの記録は若干あるが、記録にある標本を調査した結果では、全て誤同定であって、ハマベオオヒメサビキコリの分布ではなかった。渥美半島からの分布も、内海の伊川津からの記録意外は全て誤同定記録であった。

伊良湖岬の先にある神島は、往時にはハマベオオヒメサビキコリの宝庫であって、多数の個体が集団で生息していた。この種については本会の幹事である山崎隆弘さんや浅岡孝知さんらが集中的に分布調査をされたが、本種は見出すことができなかった。最近の三重昆虫談話会主催の採集会でも、本種は見出されていない。環境に対する適応性が弱い理由は今後の研究課題であるが、九州や琉球地域にも知られている。このような海水域周辺だけに適応してきた理由については大変興味のあることである。

### ハマベオオヒメサビキコリの三河湾の分布記録文献

山崎隆弘(1973) 三河地方で採集した珍しい甲虫。三河の昆虫, (3): 9-10. 三河昆虫研究会。

オオハマベヒメサビキコリとして三河渡島から (1ex.,1-VI,1969)

大平仁夫ほか(1979) 渥美郡伊川津先端の昆虫。こめつきむし (1): 1-11.

大平仁夫(1984) 姫島の昆虫類について。伊良湖 (16): 17-19.

(姫島 9-V,1982;6-VI,1982)

山崎隆弘・浅岡孝知 (1993) 三河湾・島の昆虫 : 1-149.

浅岡孝知 (1996) 渥美半島田原町の昆虫. 蟲譜 (別冊).

大平仁夫 (2003) 三河地方から採集されるコマツキムシについて (23). 佳香蝶, 55 (214). 名古屋昆虫同好会.

大平仁夫 (2007) 三河大島のコマツキムシ類. 三河の昆虫 (54) : 641-643. 三河昆虫研究会.  
大島の船着き場で1♀ (14-V,2006) 記録

大平仁夫 (2010) 佐久島のコマツキムシ類. 三河の昆虫 (57) : 715-716. 三河昆虫研究会.  
1ex.,24-IV,2009 (性不明)

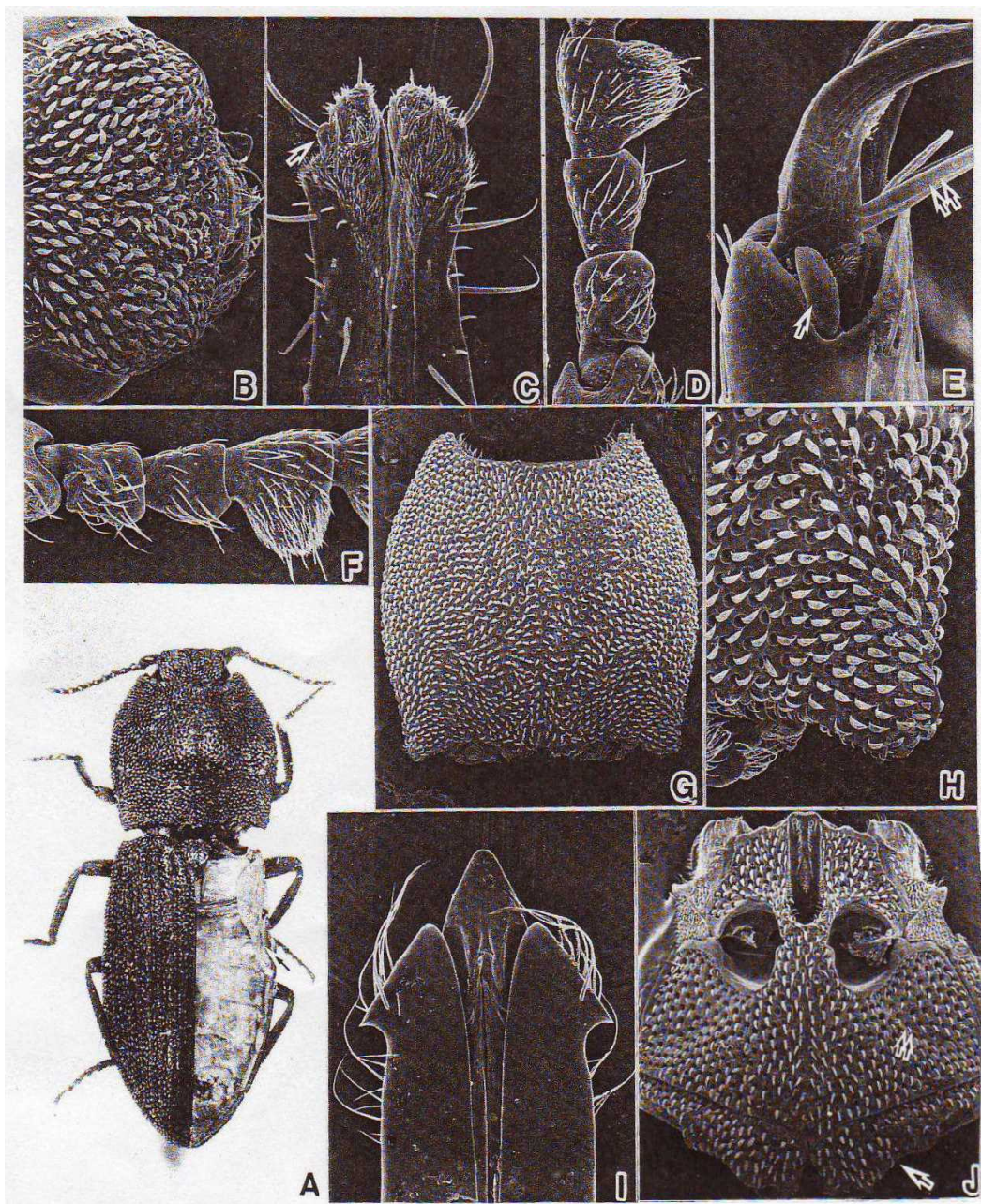


図1 A-J ハマベオオサビキコリ, 幡豆沖の島産.

A: 雄, 体長9mm B: 頭部の背面 C: 雌産卵管の末端部 D: 右触角の第2-4節

E: 後肢ふ節の末端部と爪 F: 左触角の第2-4節 G: 前胸背板の右後角部

I: 雄交尾器の末端部の覆面 J: 中胸と後胸部の覆面

## 愛知県のベニイトトンボの盛衰の記録

安藤 尚

ベニイトトンボは赤い体色の故に、トンボ愛好者でなくてもハッチョウトンボとともに昆虫愛好者一般にも知られているトンボである。

1990年代までは、「〇〇で赤いイトトンボを見たよ」という話を聞くことが時々あった。しかし、その後はそのような声を聞くことはなくなった。ベニイトトンボが激減したためと思われる。

本稿は、ベニイトトンボの採集・目撃の文献記録を繙いて、減少の状況および成虫の出現の消長を探ろうとするものである。

なお、愛知県のベニイトトンボに関しては、高崎保郎氏による「愛知県のベニイトトンボ」(1960)をはじめとする秀でた数篇の報文がある。

拙稿はそれに屋上屋を架す憂いなしとしなが、少し目線を変えて眺めてみることにしたい。

## 1 棲息地およびその採集(目撃)記録の一覧

## \* 記録の要領

○棲息地は、愛知県を尾張・名古屋・西三河・東三河の4ブロックに分け、ブロック内は市部と郡部に分けた。市区町村は50音順に配列した。

○盛衰の年代、および成虫出現の消長を知るために、採集・目撃の日付(年月日)が記された記録のみを採用した。

日付が明記されていない記録が幾つか存在するが割愛した。

○記録は、棲息地・年月日・採集(採)・目撃(目)・写真(写)記録の別・文献の順に記した。

○複数の著者による報文の場合は、標本を採集(目撃)した人を「△△・採(目)」と付記した。

○[\*]印を付したデータは未発表の記録である。

## (1) 《尾張ブロック》

愛西市(旧佐屋町)永和, 1972/8/5,高崎・採(安藤ほか,1990)

// (旧八開村)新田, 1981/8/25,松永・採(安藤・松永,1983;愛知県,1983)

// 善田新田町, 1959/6/27,採(高崎,1960)

// 西條町, 1981/7/12,安藤・採; 1981/8/30,松永・採(安藤・松永,1983)

一宮市浅井町東浅井(写真6), 1962/8/18・採; 8/20・採(安藤,1964)

// 木曾川町里小牧, 1983/9/17,採(安藤,1984)

// 東加賀野井, 1976/8/14,相田・採; 1978/9/7,安藤・採(安藤ほか,1990); 1978/9/3,安藤・採; 9/17,安藤・採(安藤・松永,1983); 1981/8/6,安藤・目; 8/23,安藤・目(愛知県,1983); 1994/6/26,採; 1995/6/25,採; 9/5,採; 1996/5/26,採; 7/21,採; 1997/9/4,採; 2001/9/1,採(相田,2001)

// 明地輛江池, 1984/7/29,相田・採(安藤ほか,1990); 1995/6/18,採(相田,2001)

// 祐久下川田(写真3), 2001/9/12,採; 2002/6/13,採; 8/13,採; 10/14,採; 2003/9/23,採; 2005/8/6,採; 2007/6/27,採; 2009/8/25,採(安藤,2010)

稲沢市祖父江町拾町野, 1986/8/24,相田・採(安藤ほか,1990)

// 祖父江町島本, 1973/8/30,採; 1979/6/24,採; 7/3,採; 1980/7/16,採; 1981/7/13,採; 7/15,採; 8/30,採; 1983/8/28,採(大野,1986)

// 祖父江町西鵜之本, 1973/7/17,採(大野,1986)

- 春日井市勝川町, 1947/7/13, 松井・採(安藤ほか, 1990)
- 瀬戸市定光寺町, 1969/7/30, 採; 9/21, 採; 1970/7/12, 採(松井・清水・鶴殿, 1974)
- 津島市老松町, 1979/8/24, 松永・採(安藤・松永, 1983)
- 〃 天王川公園, 1969/7/20, 高崎・採(安藤ほか, 1990); 1981/8/25, 松永・採(安藤・松永, 1983; 愛知県, 1983)
- 〃 中地町; 1977/5/29, 松永・採(安藤・松永, 1983); 1981/8/25, 松永・採(安藤・松永, 1983; 愛知県, 1983)
- 東海市荒尾町伊豆屋池, 1995/7/1, 目; 1996/7/31, 目(平松, 1998)
- 〃 荒尾町中新田池群, 1985/6/8, 目; 1986/8/11, 目; 1988/7/24, 目; 1991/7/13, 目(平松, 1992); 1992/8/14, 目; 1993/7/25, 目(平松, 1998)
- 〃 上野, 1968/9/10, 高崎・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 名和町, 1969/6/29, 清水・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 柴田町, 1970/8/2, 鶴殿・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 新宝町東邦ガス上野工場内, 1972/6/2, 鶴殿・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 富木島町富木島大池, 1990/7/7, 目; 1991/7/13, 目; 1991/8/18, 目(平松, 1992); 1992/7/19, 目; 1993/7/24, 目; 1994/7/3, 目; 1995/7/16, 目; 1996/8/10, 目; 1997/7/20, 目; 1998/6/27, 目(平松, 1998)
- 常滑市大曾町常滑新池, 2003/8/30, 目(平松, 2005)
- 豊明市沓掛町上高根, 1967/10/5, 山本・採(安藤ほか, 1990)
- 長久手市杵ヶ池杵ヶ池(写真 5), 1999/7/1, 採; 7/7, 採; 7/8, 採; 2000/7/18, 採(安藤, 2010); 1999/7/4, 採(高崎, 2013)
- 〃 茨ヶ廻間記公ささ池, 2000/7/6, 採(高崎, 2008)
- 〃 卯塚卯塚池, 1999/9/12, 採(高崎, 2008)
- 〃 熊張北熊(=阿畑茶島池), 1976/9/19, 山本・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 前熊一ノ井一ノ井池, 2011/8/27, 清水・採(高崎, 2013)
- 〃 岩作三ヶ峯, 1999/7/1, 採(安藤, 2010); 2000/7/1, 写真(高崎, 2013); 2000/7/18, 採(安藤, 2010); 2011/6/24, 2♂ 2♀ 樋尾隆・採[\*]; 2012/9/26, 2♂ 1♀ 樋尾隆・採[\*]
- 〃 岩作三ヶ峯農総試アヤマ池, 1993/7/18, 採(高崎, 2008)
- 〃 岩作三ヶ峯農総試一号池(南池), 2007/9/4, 採(高崎, 2008); 2012/6/7, 採(高崎, 2013)
- 弥富市(旧弥富町), 1959/6/27, 高崎・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 (旧十四山村), 1972/7/2, 相田・採(安藤ほか, 1990)
- 海部郡飛島村梅之郷, 1982/7/18, 鶴殿・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 飛島村大宝新田, 1972/7/2, 安藤・採(安藤・松永, 1983)
- 知多郡東浦町緒川, 1981/8/30, 近藤泉・採(愛知県, 1983); 1985/9/8, 安藤・採(安藤ほか, 1990)
- (2) 《名古屋ブロック》
- 熱田区熱田神宮, 1975/7/11, 安藤・採; 7/31, 阿江茂・採; 1976/7/21, 阿江・採(安藤, 1978)
- 千種区田代町新池, 2008/6/14, 水谷泰道・採; 7/5, 横地・採; 7/20, 水谷・採; 7/21, 横地・採; 8/16, 横地・目(横地, 2010)
- 〃 名古屋大学構内, 1982/8/15, 石塚三郎・採(愛知県, 1983)
- 〃 不老町鏡池, 1973/8/10, 清水・採; 1975/7/5, 鶴殿・採(安藤ほか, 1990)
- 〃 星ヶ丘山手新池, 2013/7/10, 採(高崎, 2014)
- 天白区島田天白公園大根池, 2011/7/22, 1♂ 樋尾隆・採[\*]
- 〃 天白町平針, 1969/8/10, 採(清水ほか, 1976)
- 〃 八事裏山, 1969/7/14, 清水・採(安藤ほか, 1990)

中区名古屋城外掘, 1951/7/22,採(高崎,2009); 1959/6/4,目(高崎,1960); 1959/7/9,採; 7/13,採(高崎,2015); 1968/9/28,採(高崎,2009); 1978/6/18,安藤・採; 1980/7/26,安藤・採; 1981/8/24,安藤・採(安藤・松永,1983); 1981/8/27,石塚三郎・採(愛知県,1983)

中川区打出町, 1972/6/8,山本・採(安藤ほか,1990)

〃 大蟻螂町, 1972/8/18,山本・採(安藤ほか,1990)

〃 富田町伏屋, 1972/7/1,山本・採(安藤ほか,1990)

港区多加良浦, 1972/8/15,清水・採(安藤ほか,1990)

名東区猪高町上一社, 1959/9/30,吉田・採(高崎,1960)

〃 猪高町上社塚ノ杵池, 2006/9/15,採(安藤,2010); 2007/7/18,採(高崎,2010)

### (3) 《西三河ブロック》

岡崎市庄司田一丁目, 2011/7/15,2♂ 1♀安藤・採[\*]

刈谷市井ヶ谷町中池, 1965/6/17,採(山本,1975)

豊田市篠原町, 2008/7/12,高崎・採; 7/12,安藤・採; 7/19,鶴殿・採(鶴殿,2009)

西尾市郷西, 1973/9/15,採(山本,1977)

### (4) 《東三河ブロック》

豊川市瀬木町, 1967/9/3,採; 9/19,採(山本,1973); 1981/6/28,竹本・採(愛知県,1983)

豊橋市岩崎町手洗, 2013/7/7,採(内藤,2014b)

〃 岩田町水神池(写真1), 2013/6/5,目; 7/12,目(内藤,2014a); 2013/6/30,採(内藤,2014b); 2016/7/24,3♂ 1♀,安藤・採[\*]

〃 牛川町沖野地区ガマ池, 1977/8/28,鈴木友之・採(愛知県,1983)

〃 向山町池端の向山大池, 1975/9/11,採(竹本,1976); 1978/7/15,採(中島,1979); 1981/7/9,鈴木友之・採(愛知県,1983); 1984/8/23,安藤・採(安藤ほか,1990)

以上の記録地 63 地点を図 1 に示した。近い場所は一つにまとめて表示した。

記録地は、濃尾平野(愛知県側は尾張平野とも呼ばれる)、岡崎平野・豊橋平野・尾張丘陵・知多半島にある。

尾張平野は主に木曾川によってもたらされた平野で、東側は尾張丘陵へと繋がっている。平野のほとんどは低平な沖積平野であるが、名古屋東部や犬山付近には標高 10 ~ 15m の丘陵地や洪積台地が分布している(庄司・編,1978)。

尾張平野における記録地は、尾張平野西端の木曾川周辺地域、尾張平野南半分の名古屋～津島の自然堤防・氾濫原地域、津島以南のデルタ地域、それ以南の干拓地域に多い。

名古屋市とその東部の尾張丘陵の低地に記録地が多いのは、この地域での調査が盛んに行われたことによるものと思われる。1950年代から70年代初めの頃のことである。

名古屋より西の広い地域には記録がない。この地域は高燥な乏水性の扇状地のためにため池が少ない上に、早くから畑作地などの農業用地として活用され、小都市や農村集落地域となって、ベニイトトンボが棲息することができる場所ではなくなっていたことによるものと思われる。江南市・扶桑町・大口町・一宮市・小牧市・岩倉市・北名古屋市・清須市などの地域である。

岡崎平野は、矢作川、境川によってもたらされた沖積低地と洪積世台地からなる平野である(庄司・編,1978)。

記録地が少ないのは、尾張平野に見られるような低湿地帯が少なく、土地の開発も進んでいて、ベニイトトンボが棲息するのに適したため池が形成されにくい平野であったことが影響しているものと思われる。また、調査が十分に行われてこなかったことも関係しているかもしれない。

豊橋平野は豊川の両側に広がる段丘と豊川下流部の沖積平野から構成されている(庄司・編,1978)。

ベニイトトンボが記録されている向山大池と水神池は、平野最低位の段丘面上にある豊橋市市街

表1 1947～2013年のベニイトトンボの観察日数

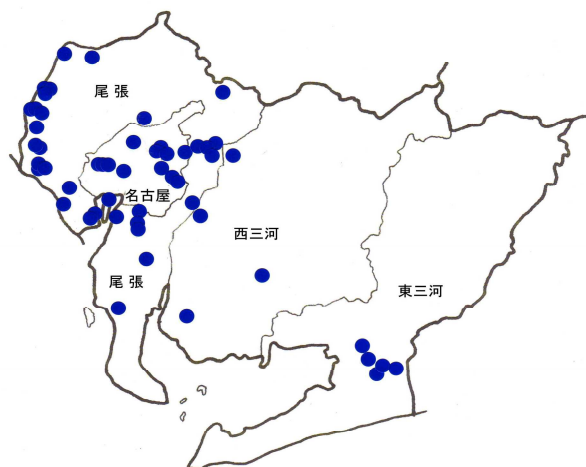
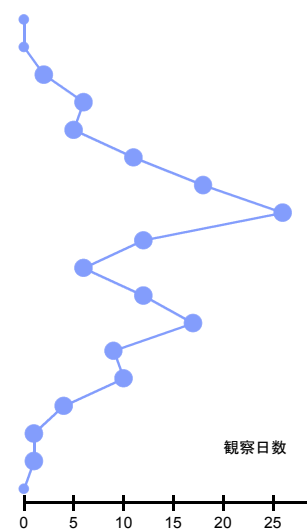


図1 ベニイトトンボの記録地(近い場所はまとめて表示)

月・旬	採集・目撃の日数
5月 上旬	0
5月 中旬	0
5月 下旬	2
6月 上旬	6
6月 中旬	5
6月 下旬	11
7月 上旬	18
7月 中旬	26
7月 下旬	12
8月 上旬	6
8月 中旬	12
8月 下旬	17
9月 上旬	9
9月 中旬	10
9月 下旬	4
10月 上旬	1
10月 中旬	1
10月 下旬	0



地区に存在する。

知多半島は尾張平野の東側に南北に繋がる尾張丘陵に連続する丘陵地である。低平な平坦地は少ない。

知多半島には、丘陵部を含む全域に多くのため池があり、その中の水生植物が繁茂し、水質良好な明るいため池にベニイトトンボが分布していたものと思われる。

1961年に愛知用水が完成すると灌漑用の池としての用が減って、管理されなくなったり潰されたりした。或いは池畔の樹木が成長して日射が遮られるようになり、水生植物の減少や水質の悪化をもたらして、イトトンボ類の棲息を困難にした。

## 2 ベニイトトンボの発生消長

愛知県内 63 箇所で、1947～2013年にベニイトトンボが観察(採集・目撃)された日数を各月の旬日ごとにまとめたものを表1に示した。

同一年の同旬内に同じ観察者が複数回観察した記録が僅かに存在するが、この場合は1回の観察として計上した。

ベニイトトンボ成虫は、5月下旬～10月中旬のおよそ5ヶ月間観察されている。

5月下旬の記録は2回で、5月26日(1996年)、一宮市東加賀野井、および5月29日(1977年)、津島市中地町である。10月中旬の記録は、10月14日(2003年)、一宮市祐久下川田である。

全体を通じてみると、観察(採集-目撃)日数が7月中旬と8月下旬にピークがある二山型である。発生が年2世代型であることを示しているように思われる。

## 3 ベニイトトンボ絶滅の要因

### (1) 池の改修・整備工事に伴う水生植物の激減、水質の悪化

#### ①一宮市浅井町東浅井 温故井池

木曾川南派川から南へ約3kmに存在する400m×50m程の池である。1950年頃までは、付近一帯は浅井山と呼ばれた雑木林であった。

1962年8月18日、20日に成虫が採集されている。この時には、クロイトトンボなどの羽化間もない個体がベニイトトンボに捕食されているのも観察されている。

ところが、翌1963年3月に現地へ出向くと、池に工事用の船が浮かんでいて、池底の土砂を浚って周囲に上げる作業を行っていた。池の周辺一帯を小公園に整備する事業が実施されていたので



ある。その後、同年の6月29日、7月13日・24日、8月12日・29日に調査したところ、6月29日と8月29日に各々1個体を目撃したのみであった。

水生植物が繁茂し、ベニイトトンボ・クロイトトンボ・セスジイトトンボ・モノサシトンボが棲息していた沼沢(1962年までの姿)は、整備された小規模の公園内のきれいな池に変わった(安藤,1964,1976) (写真6)。

1964年以後、ベニイトトンボは観察されていない。

現在、小公園の周辺は住宅地となっている。池には釣り人も見られ、市民憩いの場になっている。

公園整備に伴って行われた池の改修工事による水生植物の激減および水質の悪化が、ベニイトトンボ絶滅の要因と思われる。

### ②長久手市杵ヶ池の杵ヶ池

市街地の中にある杵ヶ池公園内の池である。

1999年7月にベニイトトンボの棲息が確認され、2000年にも採集が記録されている。

水生植物が豊かで、キイトトンボ・アオモンイトトンボ・ムスジイトトンボなども棲息する池で



写真1 豊橋市岩田町水神池, 2016年7月24日 写真2 知多郡東浦町緒川, 1985年9月7日

写真3 一宮市祐久下川田 木曾川河川敷の池, 2001年9月12日 写真4 一宮市祐久下川田, 2002年6月13日

あった。(写真5)

その後、池が整備されて水草が一掃されるに及んで、ベニイトトンボは絶滅した(高崎,2013)。

### ③名古屋市中区名古屋城の外堀

名古屋城内でベニイトトンボの棲息が初めて確認されたのは1950年である(高崎,1960)。その後1981年まで棲息が確認されている。外堀では普通に観察されたイトトンボであった。

1959年にも多数が観察されている。当時の外堀にはクロモを始めとして、センニンモ・イトヤナギモ・トチカガミ・オニビシ・ヒメビシの他、ハスやオニバスも見られた。そして水辺にはマコモ、アシなどの抽水植物が生育する水生植物豊かな水域であった(高崎,1960)。

それが、1982年の調査では沈水植物のクロモ・センニンモ・ヤナギモ、浮葉植物のトチカガミなどの存在が確認されていない。1995年になると、沈水植物・浮葉植物のすべてが絶滅していることが確認されるまでになった。この頃、外堀にコブハクチョウ・アヒルなどが入れられて、それによる食害や排泄物などによって水質が富栄養化し、水生植物の減少を招いた要因になったと考えられている(浜島,1996)。

ベニイトトンボの棲息の記録が途絶えたのは1982年頃からで、沈水植物や浮葉植物が観察されなくなったことに関係があるものと思われる。イトトンボ類の棲息にとって、きれいな水とこれらの植物の存在は必須の要件である。

ベニイトトンボが姿を消してから30年余の外堀で2015年4月26日～10月8日の間に10回実施されたトンボの調査で、マルタンヤンマ・ウチワヤンマ・タイワンウチワヤンマ・チョウトンボ・コフキトンボなど14種が記録された。しかし、イトトンボ類で記録されたのはアオモンイトトンボ1種のみである(松沢,2016)。

現在の外堀はイトトンボ類の棲息可能な水域には程遠いように思われる。

2016年6月15日の朝日新聞に、外堀で目撃された体長1m余のアリゲーターガー(肉食魚)のことが写真とともに載っている。ガーが最初に目撃されたのは7年前で捕獲作業を続けているが完全駆除には至っていないという。

### ④豊橋市向山町池端の向山大池

1970年代にはベニイトトンボの産地としてよく知られていた池である。

1975年、78年、81年、84年に採集された記録がある。

ハスが生育する水生植物豊かなきれいな水の池であった。しかし、抽水植物を排除して池の見映えを良くするためと思われるが、ハスともども水生植物が一掃された。さらに、水草を食べると言われる魚(ソウギョ)が入れられた。そのために抽水植物の生育しない見映えの良い?池に一変した。それ以後、ベニイトトンボの記録はない。



写真5 長久手市杵ヶ池の杵ヶ池, 1999年7月1日



写真6 一宮市浅井町東浅井の温故井池, 2016年6月15日

## (2) ため池の消滅

### ① 愛西市西條町の水田地域の小池

1970年代には、濃尾平野低湿地帯における水田地域の一角には、細い水路で繋がった小さな池が数個点在している姿が見られた。

西條町の水田にもそうした小さな池があり、池縁にヨシなどの抽水植物が生育し、遠くからでも小池の存在を知ることができた。このような池の一部に少数のベニイトトンボが棲息していたことがあった。

その後、耕地整理が実施されると、水深の浅い小さな池は潰されて水田と化した。大き目の水深のやや深い池は残されたが、用水路が整備されて流入する水質が変化したことなどが影響したためと思われるが、ベニイトトンボを見ることはなくなった。

濃尾平野低湿地帯の池のベニイトトンボは、このような経過で絶滅した例が多いと考えられる。

### ② 東海市荒尾町伊豆屋池および荒尾町中新田の池

前者の池では1995、96年に、後者の池は1985、86、88、91、92、93年に棲息が確認されている。

その後、いずれの池も埋め立てられて消滅した(平松俊彦氏による現地調査)。

1961年の愛知用水の完成以降、東海市のため池も減少の一途を辿ってきた。

例えば、1992年の1/14,000東海市地図には、126の池(工業地帯を除く)が載っているが、1996年に残っていたのは僅か53個の池に過ぎなかった。それまでであった林や池が宅地や耕地、道路、公園に変わっていった(平松,1998)。

### ③ 長久手市卯塚の卯塚池

1999年にベニイトトンボの採集が記録されている。

その後、2004年に池は潰されて消滅した(高崎,2008)。

### ④ 名古屋市天白区天白町平針周辺の池

この周辺の池は、1960年代初めまでは山林の中にあって周りを樹木で囲まれているものが多かった。ベニイトトンボのほかにもマダラナニワトンボなどの棲息が記録されている。1970年代になると開発が急ピッチで進められて、池や湿地は潰されて一帯は住宅地となり、大規模な住宅団地などが造られていった(清水ほか,1976)。

## 4 (余談) ベニイトトンボの現存棲息地数の推定

冒頭で記録した63ヶ所の中で2006～2015年の10年間に棲息が確認された地点は、尾張ブロック4地点、名古屋ブロック4地点、西三河ブロック2地点、東三河ブロック2地点の計12地点である。

これらの中の3～4地点は2016年現在、棲息が途切れている可能性がないとは言えない。逆に12地点以外の場所で、継続して棲息している場所があることも否定し難い。さらに63ヶ所の他の場所にベニイトトンボの棲息地が存在することも十分にあり得る。

総合的な判断として、現在でも愛知県内で20ヶ所弱のため池に棲息しているのではないかと想定している。

## 5 謝 辞

標本を恵与された樋尾隆氏、知多半島のベニイトトンボの目撃記録をご教示いただいた平松俊彦氏、常々トンボに関しての情報をいただく高崎保郎氏、棲息地の情報を寄せられた川田菜穂子氏、水生植物についてのご教示と文献を紹介された須賀瑛文氏に深甚の謝意を表したい。

## 6 文 献

- 愛知県(1983)昭和 57 年度自然環境保全基礎調査・昆虫分布調査報告書(調書), 114pp. 愛知県農地林務部.
- 相田正人(2001)愛知県尾張西部のトンボ. 佳香蝶,53(208): 53-58. 名古屋昆虫宇同好会.
- 安藤 尚(1964)愛知県一宮市浅井町のベニイトトンボ. 佳香蝶,16(57): 33-34.
- 安藤 尚(1976)尾張平野中部の数種のトンボについて. 尾張の自然を考える会々報,(3): 1-3.
- 安藤 尚(1978)熱田神宮のトンボ類. 熱田神宮林苑保護委員会調査報告書: 67-72. 熱田神宮.
- 安藤 尚(1984)トンボ類. 愛知の動物: 63 - 88. 愛知県郷土資料刊行会.
- 安藤 尚(2010)愛知と岐阜のトンボ・分布資料(12). 佳香蝶,62(243): 56-62.
- 安藤尚-松永晴彦(1983)濃尾平野のベニイトトンボ. 尾張の自然を考える会々報,(7): 6-10.
- 安藤尚-山本悠紀夫-高崎保郎-相田正人(1990)愛知県のトンボ目. 愛知県の昆虫(上): 9-78. 愛知県農地林務部自然保護課.
- 浜島繁隆(1996)名古屋城外堀の水生植物の変遷. ため池の自然,(24): 4-5. ため池の自然研究会.
- 平松俊彦(1992)愛知県東海市のトンボの近況. 佳香蝶,44(170): 26.
- 平松俊彦(1998)愛知県東海市のトンボ(中間報告). 佳香蝶,50(194): 25-28.
- 平松俊彦(2005)愛知県市町村別トンボ分布表への追加報告. 佳香蝶,57(221): 10.
- 松井一郎-清水典之-鵜殿清文(1974)愛知県定光寺付近の蜻蛉相. 佳香蝶,26(100): 101-104.
- 松沢孝晋(2016)名古屋市名城公園・名古屋大学・呼続公園の水辺環境とトンボ. *Aeschna*,(52): 27-32. 蜻蛉研究会.
- 内藤信司(2014a)豊橋市のトンボ・希少種と貴重な棲息地. 蟲譜,52(2): 7-10. 三河生物同好会.
- 内藤信司(2014b)豊橋市のトンボ. 蟲譜,53(1): 9-16.
- 中島芳彦(1979)豊橋のトンボ. 蟲譜, 17(2): 29-30.
- 大野 徹(1986)中島郡祖父江町のトンボ. 尾張の自然を考える会々報,(10): 6-11.
- 清水典之-鵜殿清文-鵜殿茂(1976)名古屋市東南部の蜻蛉相. 佳香蝶,28(105): 5-10.
- 庄司士郎-編(1978)愛知県地学ガイド. 256pp. コロナ社.
- 高崎保郎(1960)愛知県のベニイトトンボ. 佳香蝶,12(41): 24-25.
- 高崎保郎(2003)愛知県のベニイトトンボ(第2報). ため池の自然,(38): 1-8.
- 高崎保郎(2008)愛知県長久手町の蜻蛉と蝶. 佳香蝶,60(234): 133-149.
- 高崎保郎(2009)名古屋城及び周囲の動植物誌. ため池の自然,(47): 8-18.
- 高崎保郎(2010)名古屋市名東区の明德公園及び猪高緑地の蜻蛉相今昔. ため池の自然,(49): 12-18.
- 高崎保郎(2012)愛知県のベニイトトンボ(第3報). ため池の自然,(52): 13-17.
- 高崎保郎(2013)愛知県長久手市の蜻蛉・蝶・自然. 39pl.145pp. 自刊.
- 高崎保郎(2014)レッドリスト種調査(2014)に伴う名古屋市の蜻蛉分布知見若干. ため池の自然,(55): 7-13.
- 高崎保郎(2015)60 年前の名古屋市東山と名古屋城の蜻蛉追憶. なごやの多様性,2: 37-52. なごや生物多様性センター.
- 竹本秀邦(1976)三河地方におけるトンボ目録.第II報(1975年度). 三河の昆虫,(15): 57-58. 三河昆虫研究会.
- 鵜殿清文(2009)愛知県豊田市でベニイトトンボの新産地を発見. 佳香蝶,61(239): 20.
- 山本悠紀夫(1973)東三河地方未記録のトンボ. 佳香蝶,25(95): 31.
- 山本悠紀夫(1975)愛知県刈谷市井ヶ谷周辺のトンボ. 佳香蝶,27(101): 11-14.
- 山本悠紀夫(1977)西尾市郷西のトンボ. 三河の昆虫,(18): 69-71.
- 横地鋭典(2010)名古屋市千種区のベニイトトンボの記録. 佳香蝶,62(241): 10.

## ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について (その2)

杉坂 美典

## 1 はじめに

岡崎市では、ミドリヒョウモンなどの大型のヒョウモンチョウ類は、2010年以降、再びその数を増やしている。そこで、私は、昨年から岡崎市にある小呂湿地にて、9月中旬から10月中旬にかけて定点調査を行い、その出現数を調査している。

ここに2016年の調査結果をまとめ、昨年の結果と比較検証する。さらに来年も継続して調査を行う予定であるので、関係諸氏からの情報の提供やご指導・ご意見を賜りたいと思う。

## 2 調査場所

岡崎市小呂町小呂湿地

## 3 調査時間帯

晴天(雲量8以下)時の午前10時前後

## 4 調査方法

湿地の周辺を飛翔していたり、花に飛来したりしている個体を同時時間帯で確認した。同時に写真を撮影することによって個体の特徴を確認し、重複してカウントしないように注意した。

## 5 調査日

2016年の調査日は、表1の通りである。

## 6 種ごとの調査結果

## (1) オオウラギンスジヒョウモン (写真1)

## ① 記録日と個体数

・10月2日 1♀

## ② 出現数の変化

・今年はこの1頭しか確認できなかった。

## (2) ミドリヒョウモン (写真2)

## ① 記録日と個体数

- ・9月19日 1♂
- ・9月26日 5♂♂
- ・9月30日 2♂♂1♀
- ・10月2日 4♂♂1♀
- ・10月5日 1♂1♀
- ・10月7日 2♂♂1♀
- ・10月10日 1♀

## ② 出現数の変化

表1 2016年の調査日

9月15日	9月19日	9月21日	9月24日
9月26日	9月30日	10月2日	10月5日
10月7日	10月10日	10月12日	10月15日
10月18日			

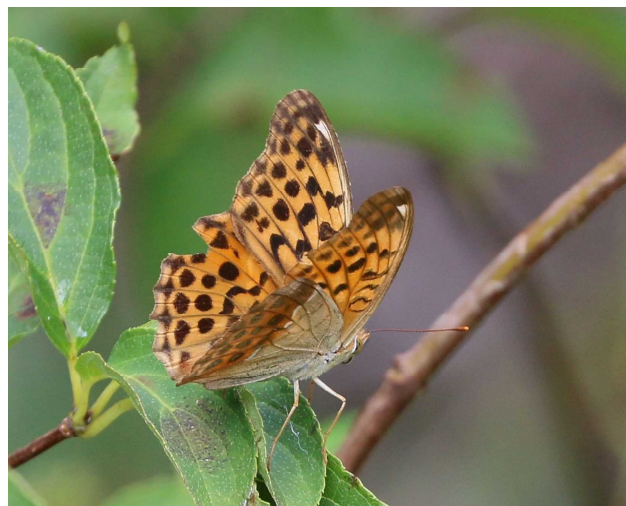


写真1 オオウラギンスジヒョウモン ♀

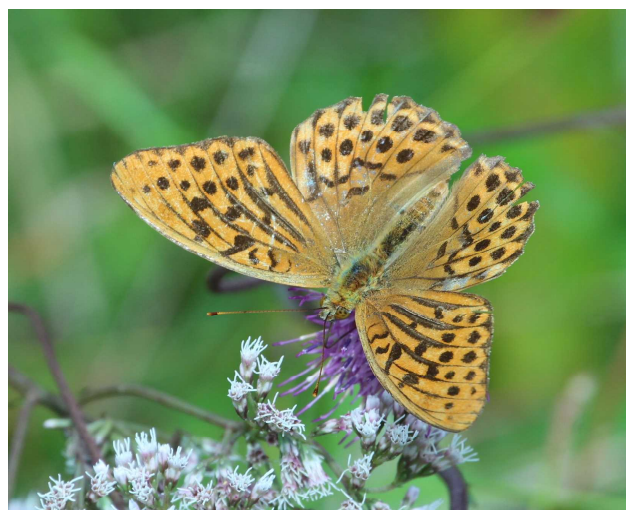


写真2 ミドリヒョウモン ♂

図1は、ミドリヒョウモンの出現数の変化のグラフである。

(3) メスグロヒョウモン

① 記録日と個体数 ・記録なし

(4) ウラギンヒョウモン

① 記録日と個体数 ・記録なし

(5) ツマグロヒョウモン (写真3)

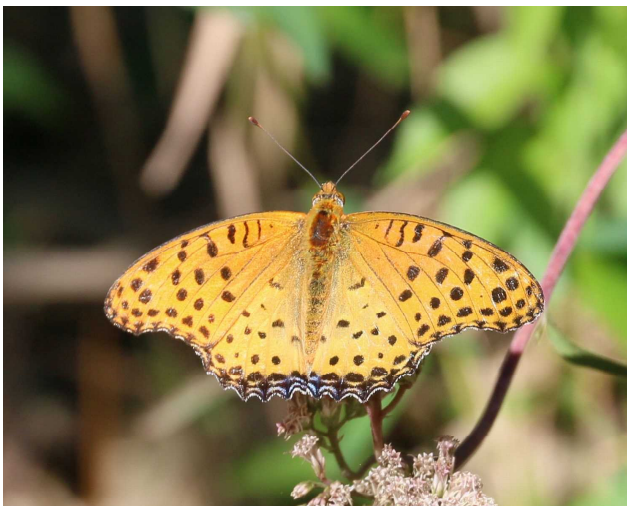


写真3 ツマグロヒョウモン ♂

① 記録日と個体数

- ・ 9月26日 1♂
- ・ 10月2日 2♂♂
- ・ 10月10日 1♂1♀
- ・ 10月12日 1♂
- ・ 10月15日 1♂

② 出現数の変化

図2は、ツマグロヒョウモンの出現数の変化のグラフである。

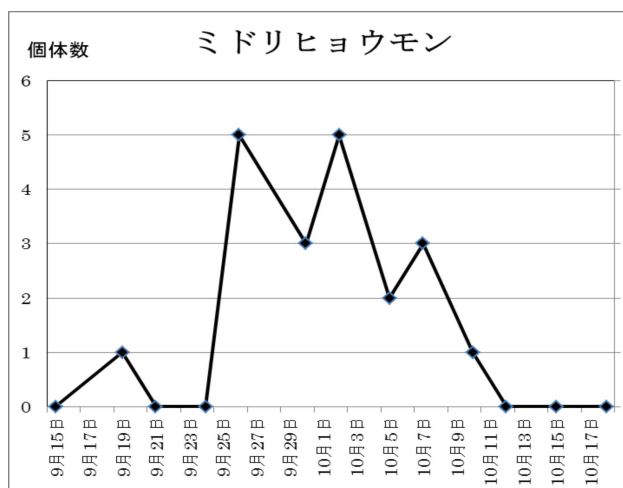


図1 ミドリヒョウモンの出現数の変化

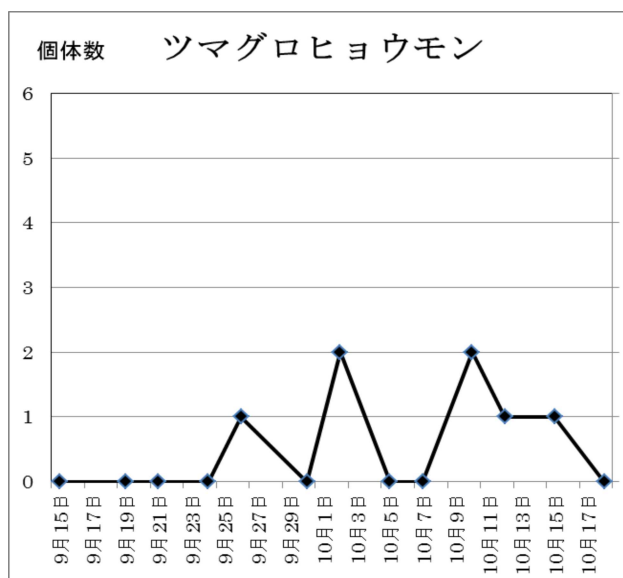


図2 ツマグロヒョウモンの出現数の変化

表2 2016年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温・最低気温

調査日	個体数	最高気温	最低気温
9月15日	0	28.2	21.7
9月19日	1	29.8	21.7
9月21日	0	25.6	20.0
9月24日	0	23.5	18.7
9月26日	5	30.5	20.3
9月30日	3	24.6	15.7
10月2日	5	28.8	22.1
10月5日	2	27.2	17.6
10月7日	3	27.7	16.9
10月10日	1	24.3	14.2
10月12日	0	24.9	13.4
10月15日	0	24.5	10.2

7 結果

(1) 2016年の9月は、天候が悪い日が多かった。そのためか、ヒョウモンチョウ類の飛来が少なく、メスグロヒョウモンとウラギンヒョウモンは確認できなかった。オオウラギンスジヒョウモンは1頭を確認できたただけであった。

(2) 表2は、2016年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温のデータである。図3は、それをグラフ化したものである。

## 8 考察

表3は、2015年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温、最低気温のデータである。図4はそれをグラフ化したものである。

2015年の9月は、晴天の日が続いたため、ミドリヒョウモンの出現数は1日の最多数が9頭で、安定して増減していた。しかし、2016年の9月は、悪天候が続き、晴れの日が少なく、出現数は1日の最多数が5頭であった。これは、2015年の約半数で、日によって増減の差が大きかった。雲量が8に達したような晴天日では、気温26℃以上に上がらなかったことが原因しているように思える。

2016年9月の中旬から下旬は特に雨天や曇天の日が多かった。そのため、2015年9月のように放射冷却が起こりにくく、最低気温が20℃を超える日が続き、下がり方も鈍かったので、夏眠から覚める個体数が少なく、出現数が少なかったと思われる。

昨年と今年の結果から、9月になって最低気温が18℃を下回るようになると、夏眠から覚めはじめると考えられ、飛来する個体は、9月の終わりから10月初めに最も多くなると思われる。

10月2日を過ぎると、最低気温が15度を下回るようになり、夜間の体温低下によって死滅する個体が多くなると思われる。

夏眠後の成虫の生存期間（写真の個体識別では、推定10日間程度）はほぼ決まっています。早く目覚めた個体は、早く産卵を終わらせて早く死に、遅く目覚めた個体は、遅くまで生存するのではないだろうか。このことによって、出現数の変化が9月下旬から10月上旬をピークとした山型になると思われる。

ツマグロヒョウモンは、亜熱帯である台湾にも広く分布する種であるが、晩秋の寒冷にも適応している。岡崎市内では、11月での記録は多く、1999年12月2日に新鮮な個体が記録されており、小呂湿地でも同様に晩秋になっても出現していると思われる。

## 9 おわりに

今年の悪天候は、小呂湿地において、ヒョ

表3 2015年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温・最低気温

調査日	個体数	最高気温	最低気温
9月9日	0	26.1	21.7
9月12日	0	29.1	18.7
9月18日	1	26.5	14.2
9月20日	3	29.0	10.2
9月23日	4	27.2	17.7
9月26日	6	27.7	18.4
9月28日	8	29.0	18.2
10月2日	9	26.4	12.7
10月3日	6	25.8	10.1
10月6日	4	24.7	14.3
10月8日	2	24.3	9.7
10月10日	0	19.9	11.5
10月12日	1	23.0	9.3
10月15日	0	23.0	8.5
10月17日	0	24.6	13.9
10月19日	0	24.4	10.9

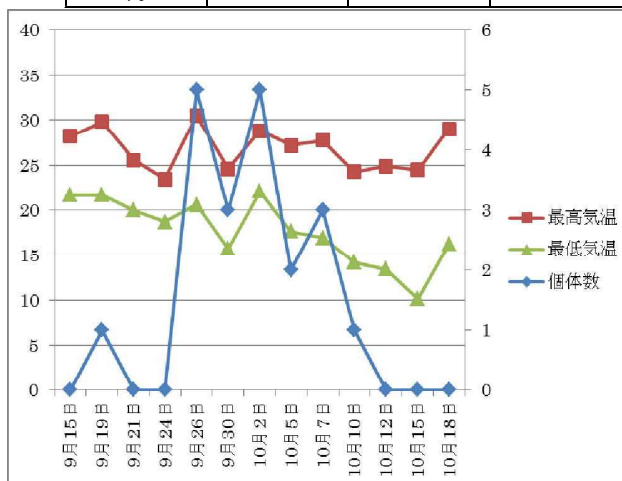


図3 2016年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温・最低気温

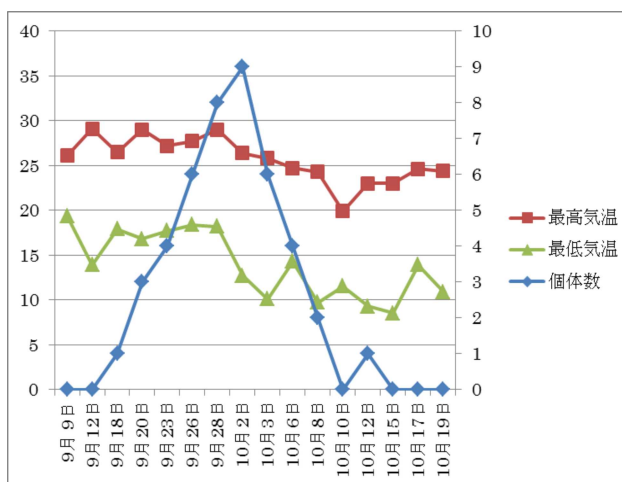


図4 2015年のミドリヒョウモンの出現数と岡崎市の最高気温・最低気温

ウモンチョウ類の出現数が減っただけでなく、種類数も少なくなった。この状況は、おそらく市内の丘陵地でも同じであると思われる。この現象が、来年の春のヒョウモンチョウ類の発生に影響を与えなければよいと思う。

#### 文献

杉坂美典,2016.ヒョウモンチョウ類5種類の小呂湿地における出現期について. 三河の昆虫 No.63 : 858.

杉坂美典,2016.岡崎市の蝶. 杉坂美典ホームページ. < <http://sugisaka.sakura.ne.jp/>> (アクセス日: 2016/10/20)

杉坂美典,2014.レッドデータブックおかさき 2014 : 286-287. 岡崎市.

(E-Mail : [sugisaka@sinfonia.or.jp](mailto:sugisaka@sinfonia.or.jp))

---

### ルイスホソカタムシの記録

山本 英治

(〒 611-0021 京都府宇治市宇治若森 43-29 YAMAMOTO Eiji)

愛知県岡崎市内にてルイスホソカタムシ *Gempylodes ornamentalis* を確認しているので報告する。

日時: 2016/6/19 12時 場所: 愛知県岡崎市池金町内 (北山湿地)

ナラ枯れのため切り倒された丸太上に3頭が飛来していた。本種はククイムシ類を捕食するため、ククイムシの孔道が穿たれたナラ類の幹に飛来する。筆者はカシノナガククイムシによるナラ枯れが岡崎市より早く進行した京都府宇治市においても昨年および一昨年に多数を確認している。岡崎市においてもナラ枯れの拡大によりカシノナガククイムシが増え、ルイスホソカタムシも一時的に増加しているものと考えられる。



写真1 (2016618\_ルイスホソカタムシ1) ナラ枯れのため切り倒された丸太を徘徊するルイスホソカタムシ  
写真2 (2016618\_ルイスホソカタムシ2) 孔道に頭部を差し込むルイスホソカタムシ



## ミドリカメノコハムシを新城市作手にて採集

山崎 隆弘

新城市作手地区は標高 500-550 m の高原であるが、ここに生息する昆虫類は三河山岳から連続して分布する種が少なくない。今回、作手高里の亀山城址に隣接する休耕田と思われる湿地（写真1）の一角で、スィーピングによる調査をおこなったところ、ハムシ科甲虫のカメノコハムシ亜科ミドリカメノコハムシ *Cassida erudite* Baly, 1874（写真2）を採集したので報告する。

〔採集記録〕作手高里亀山城址, 7exs., 18-V-2016. 山崎隆弘採集.



写真1 亀山城址の域内にある休耕田と思われる湿地



写真2 ミドリカメノコハムシ  
作手高里亀山城址産（体長7.5mm）

本種は体長 7.0-8.0 mm で、北海道・本州・対馬に分布する寒地系の種で、愛知県では奥三河山地に分布している。生時は美しい緑色を呈しているが、標本の緑色は時間の経過と共に退色する。本種の寄主植物は湿潤地に生育するシソ科のアキチョウジ、山地の湿地に生える多年草のヒメシロネであるが、残念ながら現地での植物の確認をしなかった。しかし、作手村誌資料編の植物目録にはヒメシロネが掲載されているので、おそらくこれが当地における寄主植物ではないかと思われるので、次の機会にはぜひ確認したいと考えている。

愛知県における本種は、豊根村牧ノ島（山崎・穂積 1990）・茶臼山（大平ほか 1980；山崎 2003；山崎 2016）、設楽町裏谷（山崎・穂積 1990）・裏谷・桑平（山崎 1996）、豊田市大多賀町・小田木町・稲武町（山崎 2016）などで記録されている。

今回の記録は作手地区からは初めてとなるものであり、本県では最も南部となるが、当地からやや離れた設楽町裏谷の生息地との間にはまだ採集例がない。この場所で得られたものは遇産なのか、温存されていたものかはよく分からないが、興味深い採集例である。

最後に、日頃ご指導とお世話になっている本会の会長大平仁夫博士に、心から厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

大平仁夫ほか（1980）愛知県豊根村の動物・鞘翅目：195-220. 豊根村教育委員会.



写真3 亀山城址の標識



写真4 ミドリカメノコハムシを採集した場所

豊田市生物調査報告書作成委員会 (2016) 豊田市生物調査報告書・資料編 (CD版): 豊田市.  
山崎隆弘・穂積俊文 (1990) 愛知県のハムシ科, 愛知県の昆虫 (上): 434-460 愛知県農地林務部  
自然保護課.

山崎隆弘 (1996) 昆虫類・甲虫類・ハムシ科: 設楽町誌・資料編: 526-537. 北設楽郡設楽町.

山崎隆弘 (2003) 茶臼山高原のハムシ類. 蟲譜, 41 (2): 20-26, 三河生物同好会.

山崎隆弘 (2016) 愛知県に産するカメノコハムシ類. 蟲譜, 54 (2): 9-14, 三河生物同好会.

山崎隆弘 (2016) 昆虫類・甲虫類・ハムシ科. 豊田市生物調査報告書<分冊その2>: 148-159.  
豊田市.

## 2016年 西三河平野部アキアカネの記録

### 小鹿 亨

アカネ類のトンボは近年姿を見なくなっている昆虫類である. 特にアキアカネ *Sympetrum frequens* (Selys, 1883)は, いわゆる「赤とんぼ」の代表的な種であるにもかかわらず, 筆者が在住する安城市や隣の知立市ではすっかり少なくなった.

筆者は安城市と知立市で, 以下のように本種を観察しているので, 記録として報告する.

《データ》アキアカネ *Sympetrum frequens*

2016年10月24日 安城市篠目町溝川 1♀観察.

2016年11月5日 知立市弘法町弘法下 1♂2♀観察.

2016年11月5日 安城市篠目町溝川 1♀観察. (写真)

近年, 当地方で秋期に見られるトンボ類は, ほとんどがウスバキトンボかシオカラトンボになっている. アキアカネをはじめとしたアカネ類は激減している. その要因として, 農薬の使用があげられている. 今後も継続的に記録を残していく必要性を感じる.



写真2 2016.11.5 安城市篠目町溝川

## 知多半島におけるミンミンゼミの記録の整理

吉鶴 靖則

### 1 はじめに

ミンミンゼミ *Hyalessa maculaticollis* (Motschulsky) の愛知県尾張地方知多半島における分布状況は、今一つ明らかにされておらず、記録の乏しさから偶産が疑われる地域も含まれている。今回、記録が少ないと思われる東海市で確認したことを機会に、知多半島の分布状況の資料とすべく、記録をまとめたので報告する。

なお、本発表では知多半島でのセミ科の普通種をニイニイゼミ *Platypleura kaempferi* (Fabricius), アブラゼミ *Graptopsaltria nigrofuscata* (Motschulsky), クマゼミ *Cryptotympana facialis* (Walker), ツクツクボウシ *Meimuna opalifera* (Walker) の4種、普通種以外はミンミンゼミ, ハルゼミ *Terpnosia vacua* (Olivier), チッチゼミ *Kosemia radiator* (Uhler), ヒグラシ *Tanna japonensis* (Distant) の4種とした。

### 2 分布の掲載状況と記録

知多半島の市町は東海市, 大府市, 知多市, 東浦町, 阿久比町, 常滑市, 半田市, 武豊町, 美浜町, 南知多町の5市5町があり, いずれの市町も郷土の自然が市史や市町誌などにまとめられている。また, 知多半島などの広域での文献もある。これらの掲載を確認したものは下記通りである。

#### <愛知県>

県の自然をまとめた『愛知県史 別編 自然』(森, 2010), 県の動物相をまとめた『愛知の動物』(堀・佐藤, 1984), 県の昆虫相をまとめた『愛知県の昆虫』(堀ほか, 1990) のいずれもミンミンゼミの名前はあるが, 知多半島での分布に言及した記述や記録が掲載されていない。

#### <知多半島>

『南知多の自然』では小鈴谷(常滑市), 野間・河和(以上, 美浜町), 内海・豊浜・師崎と日間賀島・篠島・木島・野島(以上, 南知多町) で南国性の昆虫の分布に主眼を置いたとする調査で, セミ類とした上で普通種とハルゼミを列挙した後に追加して「など」という記述があるが(名和ほか, 1957), 「など」に該当する種はこの文献からは不明である。『北知多の自然』は常滑市, 美浜町, 半田市, 武豊町が調査範囲とされ, 普通種とハルゼミが掲載されている(神谷ほか, 1958)。県を地域ごとに分けて知多半島の動物相をまとめた『愛知の動物』ではセミ全体が掲載されていない(安藤ほか, 1967)。したがって, いずれもミンミンゼミの名前が見当たらない状況である。

#### <東海市>

『東海市史 通史編』は普通種のみ(小川ほか, 1990), 市の自然を紹介した『東海市の自然』は普通種とハルゼミが掲載されているが(原, 1979), 共にミンミンゼミはない。『東海市の自然をたずねて』では普通種とハルゼミと共にミンミンゼミも掲載され(東海市, 1995a; 東海市, 1995b), 個人記録では横須賀町での日付の掲載がないものと, 詳細場所が不明な初鳴き記録で14-VIII-1992, 11-VIII-1994をあげたものがある(吉村, 1996)。筆者の手持ちの記録では下記の2点がある。

15-VIII-2016, 大田町瀬戸山, 1♂(鳴き声, 目撃)

28-VIII-2016, 中央町3丁目(大池公園), 1♂(鳴き声: 吉鶴弥生 確認)

大池公園の記録は鳴き声の録音がされていたため, 筆者も確認済である。同日の別の時間に少し離れた場所でも聞いたということから, 2♂の可能性もある。今回は鳴き移りを行う生態が知られ

ているセミのため、最低限の個体数である1♂として取り扱った。また、昨年にも声を聞いていたということである。したがって、ミンミンゼミは数少ないが分布しているようである。

#### <大府市>

『大府市誌』では普通種のみ掲載である(小川ほか, 1986)。『大府市誌 資料編』では本文中にセミ類とした上で普通種を列挙した後に追加して「など」という記述があるが、目録のセミ科には「など」に該当する種が掲載されていない(川崎, 1988)。文章からはセミ類が広義のセミ亜目を示すものではなく、狭義のセミ科を示すものと思われるが、調査不足で普通種以外が発見される可能性があることなどを理由に「など」を用いた曖昧な表現で補った感があり、「など」に該当するミンミンゼミの記録は見つけていない。

#### <知多市>

市全域を扱った『知多市誌 本文編』ではセミ科とした上で普通種に追加した「など」という記述がある(杉田, 1981)。『知多市誌 資料編』ではセミ全体が掲載されていない(沢田, 1983)。地区ごとにまとめられた文献では普通種と共にミンミンゼミも掲載され、『岡田町誌』に岡田では多く発生(竹内, 1990)、『長浦のあゆみ』に長浦ではまれに鳴き声を聞くとある(小林, 1998)。このため、『知多市誌 本文編』による「など」の記述はミンミンゼミを内包している可能性がある。ミンミンゼミは局地的な分布域があるものの、全体としては数少ない分布のようである。

#### <東浦町>

『東浦町誌 本文編』では、旧版はセミ全体が掲載されておらず(稲垣, 1968)、新版は普通種のみ掲載で、ハルゼミが未確認と明記されている(柿田, 1998)。『東浦町誌 資料編』の本文は普通種のみ掲載で、ミンミンゼミが未確認と明記されているが、目録には隣市町の生息から分布を推定してハルゼミとミンミンゼミも掲載されている(柿田, 2000)。ミンミンゼミの記録そのものは見つけておらず、この目録の取り扱いには注意が必要である。

#### <阿久比町>

『阿久比町誌 本文編』ではセミ類とした上で普通種に追加した「など」という記述が見られる(新美ほか, 1993)。『阿久比町誌 資料編』では本文中にセミ類とした上で普通種とハルゼミに追加した「など」という記述があるが、目録のセミ科には「など」に該当する種が掲載されていない(知崎・舟橋, 1991)。したがって、『阿久比町誌』だけでは「など」の記述の使い方に疑問が残り、ミンミンゼミの記録は不明となる。ただし、『東浦町誌 資料編』では隣接する阿久比町でごく稀に鳴き声を聞くとされている(柿田, 2000)。ミンミンゼミは稀ながら分布しているようである。

#### <常滑市>

『常滑市誌』ではセミ科とした上で普通種に追加した「など」の記述はあるが(原, 1976)、これに該当する種は不明であり、ミンミンゼミの記録は見つけていない。

#### <半田市>

『半田市誌 本文篇』では、旧版はクマゼミ、アブラゼミ「など」とされ(石川, 1971)、新版はセミ科とした上で普通種とハルゼミが掲載されている(磯貝, 1989)。『半田市誌 資料編』ではセミ全体が掲載されていない(沢田, 1968; 小川, 1969)。したがって、『半田市誌』だけではミンミンゼミの記録は不明となるが、『東浦町誌 資料編』では隣接する半田市でごく稀に鳴き声を聞くとされている(柿田, 2000)。亀崎で鳴き声を時々聞くという話を耳に入れたことはあるが、筆者は未調査である。ミンミンゼミは稀ながら分布している、もしくは局所的な分布の可能性はある。

#### <武豊町>

『武豊町誌 本文編』(糸ほか, 1984)、『武豊町誌 資料編』(原・柿田, 1983)の記述は共に普通種とハルゼミである。ミンミンゼミの記録は見つけていない。

### <美浜町>

『美浜町誌 本文編』では普通種に追加した「など」の記述が見られるが(糸, 1983), 『美浜町誌 資料編』ではセミ全体が掲載されておらず(原・原, 1985), 『美浜町誌』だけではミンミンゼミの記録は不明である。ただし, 愛知県が発行する『自然観察ガイド』ではミンミンゼミが掲載され, 富具崎(美浜町野間)よりも南では声がよく聞かれるとされる(竹内, 1983)。筆者の手持ちの記録では下記のものがある。実際, 美浜町南部では鳴き声を多く聞き, 分布に疑いはない。

7-VIII-2008・3-VIII-2010, 野間富具崎(富具崎公園), 多数(鳴き声, 目撃, 撮影)

### <南知多町>

『南知多町誌 本文編』では普通種とハルゼミしか掲載されていない(森田ほか, 1991)。『南知多町誌 資料編』では普通種とハルゼミと共にミンミンゼミも掲載され, 声をよく聞くとある(柿田, 1993)。毎年鳴き声が聞かれる場所に内海を挙げた文献もある(小林, 1998)。実際, 鳴き声を多く聞き, 分布に疑いはない。

表1 知多半島における

ミンミンゼミ分布状況

市町名	生息状況
東海市	少
大府市	—
知多市	少
東浦町	—
阿久比町	稀
常滑市	—
半田市	稀?
武豊町	—
美浜町	多(南部)
南知多町	多

※ —: 記録なし

### 3 まとめ

以上の結果をまとめると右表のようになる。記録がない地域においても, 文献の目録自体が充実していないところが多いため, 記録がないことで分布していないとはいえない部分があるが, 知多半島全体で総じてみると, 美浜町南部と南知多町には分布するが, それ以外では稀か少ないようである。渥美半島と知多半島の美浜町野間富具崎より南は暖地性の植物相を示す地域であることが指摘され(井波, 1957), 渥美半島では照葉樹の多く残っている地域にミンミンゼミが多いとされている(鈴木, 1980)。これらのことから, 渥美半島同様, 知多半島でも暖地性の植物相を示す照葉樹林域とミンミンゼミの主要な分布域がよく一致しているようである。

知多半島の中部の記録では偶産を疑った文献もあるが(小林, 1998), 仮にミンミンゼミの記録の多くが偶産であれば, エゾゼミ *Auritibicen japonicus* (Kato) などの他のセミの記録が出てこないのは不思議な感がある。各市町では稀な記録であっても知多半島全体としては広く確認されていることから, 安易に各地で偶産した解釈するよりも, 細々と分布している可能性があることも視野に入れて検討する方がよいものと思われる。注目すべきは『東海市の自然をたずねて』に3年ほど前から大池公園などで見られるようになったとあることで(東海市, 1995a), 調査期間が1993年4月～1994年8月とされていることを考慮すると(東海市, 1995b), 1990年ごろから見られるようになったということになる。これが事実とすれば, 雑木林の手入れが行き届かなくなるなどで林内が暗化しているところや照葉樹林化が進んでいるところで発生しているなど, 環境変化といった要因による個体数の増加や分布の拡大ということが起きているのかもしれない。知多半島全体での分布を論じるには, 広範囲かつ継続的な調査を行う必要があるようである。

この他にも気づかなかった知多半島での記録があると思われる。ご存知の方はご教示いただけると幸いです。また, データを提供していただいた吉鶴弥生氏に感謝する。

### 4 引用文献

安藤威夫・安藤 尚・梅村鋤二・佐藤 武・中根吉夫・原田一夫・原 穰・水野一尚・三津井 宏・村田新一・杉浦正巳・竹内美智雄・坂野栄之助(1967) 知多半島。研究報告第72号 愛知の動物。

43-66. 愛知県科学教育センター。

知崎健吾・舟橋董八(1991) 昆虫。阿久比町誌 資料編五(自然)。327-390。阿久比町。

- 原 和宏 (1979) セミの仲間. 東海市の自然. 212. 東海市民生経済部緑花推進課.
- 原 穰 (1976) 動物. 常滑市誌. 83-95. 常滑市役所.
- 原 穰・原 瑛智 (1985) 動物. 美浜町誌 資料編二. 23-56. 美浜町役場.
- 原 穰・柿田典宏 (1983) 動物. 武豊町誌 資料編二. 3-39. 武豊町.
- 堀 義宏・浅岡孝知・原田猪津夫 (1990) 愛知県の頸吻亜目. 愛知県の昆虫 (上). 105-122. 農地林務部自然保護課. (※オリジナル文献タイトルの筆者は堀だが, これは堀の誤植である.)
- 堀 義宏・佐藤正孝 (1984) 半翅類. 愛知の動物 愛知文化シリーズ 3. 99-107. 愛知県郷土資料刊行会. 名古屋.
- 稲垣健太郎 (1968) 東浦町の自然環境. 東浦町誌. 1-20. 愛知県知多郡東浦町教育委員会.
- 井波一雄 (1957) 南知多の植物分布地理概論及木島野島の植物相. 南知多の自然 (中部日本自然科学調査団報告 第一報). 4-10. 中部日本新聞社・中部日本自然科学調査団. 名古屋.
- 石川芳夫 (1971) 動物. 半田市誌 本文篇. 37-40. 愛知県半田市.
- 磯貝泰史 (1989) 動物. 新修 半田市誌 本文篇上巻. 179-226. 愛知県半田市.
- 柿田典宏 (1993) 昆虫. 南知多町誌 資料編 2 自然. 247-300. 南知多町.
- 柿田典宏 (1998) 昆虫類. 新編 東浦町誌 本文編. 42-46. 愛知県知多郡東浦町.
- 柿田典宏 (2000) 昆虫. 新編 東浦町誌 資料編 2 (自然). 269-348・475-487. 愛知県知多郡東浦町.
- 神谷一男・名和正雄・名和秀雄・穂積俊文 (1958) 知多半島北部の昆虫相. 北知多の自然 (知多半島北部の自然) 中部日本自然科学調査団報告 第二報. 25-28. 中部日本新聞社・中部日本自然科学調査団. 名古屋.
- 川崎国雄 (1988) 昆虫. 大府市誌 資料編 自然. 335-388. 愛知県大府市.
- 小林俊光 (1998) 長浦地区の昆虫. 長浦のあゆみ. 11-18. 長浦郷土誌作成委員会.
- 糸 浩一 (1983) 動物. 美浜町誌 本文編. 30-56. 美浜町役場.
- 糸 浩一・石川時子・原 穰・柿田典宏 (1984) 生物. 武豊町誌 本文編. 38-64. 武豊町.
- 森 勇一 (2010) 愛知の昆虫. 愛知県史 別編 自然. 208-245. 愛知県.
- 森田博文・原 瑛智・柿田典宏 (1991) 動物. 南知多町誌 本文編. 40-68. 南知多町.
- 名和正雄・穂積俊文・名和秀雄 (1957) 南知多の昆虫相について. 南知多の自然 中部日本自然科学調査団報告 第一報. 31-32. 中部日本新聞社・中部日本自然科学調査団. 名古屋.
- 新美博幸・知崎健吾・原 瑛智 (1993) 動物. 阿久比町誌 本文編. 43-66. 阿久比町.
- 小川雅康・早川昌宏・新美博幸・岩月照久 (1990) 動物. 東海市史 通史編. 49-78. 愛知県東海市.
- 小川雅康・川崎国雄・原 瑛智 (1986) 動物. 大府市誌. 30-62. 愛知県大府市.
- 小川ちよ (1969) 自然篇. 半田市誌 資料編 II. 1-37. 愛知県半田市.
- 沢田三郎 (1968) 自然篇. 半田市誌 資料編 I. 1-32. 愛知県半田市.
- 沢田三郎 (1983) 自然. 知多市誌 資料編二. 1-108. 知多市役所.
- 杉田勲生 (1981) 動物. 知多市誌 本文編. 45-56. 知多市役所.
- 鈴木友之 (1980) 渥美半島のセミ. 渥美半島の昆虫. 42-43. 東三河アマチュア昆虫研究グループ. 豊橋.
- 竹内勝彦 (1990) 動物. 岡田町誌. 32-34. 知多市教育委員会.
- 竹内哲也 (1983) 上野間・富具岬コース. 自然観察ガイド 7 愛知の自然をたずねて (知多半島). 19-29. 愛知県農地林務部自然保護課.
- 東海市 (1995a) セミ. 東海市の自然をたずねて ふるさとの四季. 40. 東海市.
- 東海市 (1995b) 植物・動物リスト. 東海市の自然をたずねて ふるさとの四季. 137-170. 東海市.
- 吉村暁夫 (1996) セミの話. 知多の自然誌 ほたる. (10): 26-27. 東海市ホタルの会.

## モートンイトトンボの東海市における発生の可能性について

吉鶴 靖則

### 1 はじめに

モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris) の愛知県東海市における分布状況は、過去に記録はあるが絶滅の可能性が高い産地とされ (間野・安藤, 2009), 近年の記録は生息可能な環境がないことから偶産と考えられた 1 例 (加木屋町菊尾, 10-VII-2015, 1 ♂) がある (吉鶴, 2016). その後, 近隣で複数個体の撮影に成功したため, 記録すると共に発生の可能性を考察した.

### 2 調査方法

成虫の体長や体型, 生息環境が似ているアジアイトトンボ *Ischnura asiatica* Brauer では 0.5km を超える移動や, ときに 1.0km を超える移動が記録されている (若杉, 2012). これを参考に生息が予想される環境の調査範囲を, 偶産と考えられた地点から半径 1.5km 以内と設定した. 環境調査は 2015 年 7 月中旬～2016 年 4 月にできるだけ細かな位置取りで季節を変えて各箇所とも複数回, 任意で踏破し, 成虫, および, 越冬を含めた幼虫期でも生息可能な環境を候補地として洗い出した.

モートンイトトンボの多産地, 愛知県豊田市の古瀬間町, 市木町, 矢並町の休耕田や湿地での観察では (吉鶴ほか, 2012), おおむね 5 月上旬に羽化が始まり, 6 月 25 日前後に個体数がピーク, 7 月に入ると減少し, 7 月下旬には見られなくなる. 成虫発生期は東海市が豊田市よりも南側に位置し標高が低いことから, 発生が早まる可能性が予想された. 逆に候補地が低温の湧水の存在が予想される環境下で, 発生が遅れる可能性もあった. このため, 成虫の調査は豊田市の発生期と前後してもさし障りがない期間として 2016 年 5 月中旬～7 月下旬の午前中, 候補地を中心に行った.

### 3 記録

東海市大田町上前田, 26-VI-2016, 1 ♀, 1-VII-2016, 1 ♂; 大田町替地, 1-VII-2016, 1 ♂

### 4 環境

確認地は常滑層群の堆積物を母岩とする丘陵地で (伊藤ほか, 1998), 谷部を中心に平地と緩やかな傾斜地を利用して棚田を形成している, いわゆる谷戸的な環境で, 愛知県東海市の大田町下前田・上前田・前畑・替地と富木島町内堀・北広にまたがった地域で, ひとまとまりの谷戸である.

棚田となった水田環境の中に, 休耕田, 水田の周囲を取り巻くように形成された水路「手あぜ」, ヨシ *Phragmites australis* (Cav.) Trin. ex Steud. の侵入を防ぐための緩衝帯としてヨシ原と水田の間に設けられた幅 1～2 m ほどのヨシ原を刈り込んでできた湿地など, 多様な環境が見られる. それらの植生はさまざまで, 休耕田ではキシュウスズメノヒエ *Paspalum distichum* L. を中心にガマ *Typha latifolia* L., ヨシなどが点在するもの, チゴザサ *Isachne globosa* (Thunb.) Kuntze を中心にイグサ *Juncus decipiens* (Buchenau) Nakai やイボクサ *Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz. などが点在するものなどがある. 手あぜは水深が 20cm を超え, 水路の斜面などの浅いところではキシュウスズメノヒエやチゴザサ, イボクサなどが生えている. ヨシ原と水田の間の緩衝帯は水深が 5cm 前後の浅いところが多く, ミゾカクシ *Lobelia chinensis* Lour. を中心にセリ *Oenanthe javanica* (Blume) DC., キシュウスズメノヒエが混在するもの, ミゾソバ *Persicaria thunbergii* (Siebold et Zucc.) H. Gross とチゴザサを中心とするもの, キシュウスズメノヒエを中心とするものなどがある. いずれの休耕田や緩衝帯においても群生しやすい植物が多いが, 水路維持や農作業などのために草取りや草刈り

といった人為的圧力を受け、7月下旬を除くと成虫の調査期間では水面が見え、密生していないところが多い。

水田の幾つかには手あぜが見られるが、これは低水温の水が直接水田に入らないようにし、手あぜを通るうちに水温が上昇するようにした水路であり、これがあることは水源に湧水のような水温が低く、常時水が供給されるところがあることが想定される。確認地は基本的に乾田化されているが、乾ききらない水田や冬期に滞水している手あぜが幾つもあることから、タシギ *Gallinago gallinago gallinago* (Linnaeus) などの越冬地となっている。また、緩衝帯の水辺も冬期に滞水している。休耕田、緩衝帯、手あぜといった一年中維持される水辺環境が点在している状況であった。

## 5 考察

環境調査範囲には偶産個体の供給源となりうる生息適地はほとんどなく、確認地は偶産地から直線で 840 ~ 990m の距離であり、飛来が予想できる距離であった。その他の候補地では成虫が確認できなかった。発生地をより遠方に考えるとすれば、すべてが偶産で同じ谷戸に飛来したとは考えづらい。また、逆にすべてが飛来だとすれば、それは確認地がトンボに生息適地と認められたために集まったことを示すと考えられ、確認地を生息地と考えても差し支えないと考えられる。

モートンイトトンボの生息地は、草丈の低い植物が多い比較的開放的な池沼や低層湿原、水田・休耕田(村木, 2010)、平地および丘陵地の湿地の背丈の低い草が繁茂した浅い滞水や水田などとされている(石田ほか, 1988)。その生息には幼虫の生息地である湿原や休耕田、成虫の活動の場となる生息地周辺の草地が必要とされる(間野・安藤, 2009)。したがって、確認地の環境は、狭いながらも成虫、幼虫共に生息可能な環境が複数点在しており、実際、狙って探したこのような休耕田と緩衝帯の水辺、その横の水田でモートンイトトンボを確認するに至っているため、生息可能な環境が整っていると考えられる。

確認地の谷戸では一部の休耕田の中に立ち入れず、調査が外周のみで見落としの可能性が高い生息適地を残す結果となった。また、成虫の最盛期を想定した5月下旬から6月末までの天候が悪く調査日数が少なかったこと、成虫が確認できなかった候補地での調査を多めに行ったことから、確認数は少なかったものの、個体数を維持できる程度の発生があった可能性があると思われる。

以上のことから、産卵や羽化、ヤゴの確認といった確実な発生の証拠は見いだせなかったが、確認地において生息している可能性が高く、継続発生していた可能性があると思われた。

## 6 引用文献

- 石田省三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊(1988) モートンイトトンボ. 日本産トンボ幼虫・成虫 検索図説. 18-19. 東海大学出版会. 東京.
- 伊藤 孝・牧野内 猛・古澤 明・鳥越祐司(1998) 知多半島の活撓曲を切る 2 種類の断層. 地質学雑誌. 104 (8) : 538-549. 日本地質学会.
- 間野隆裕・安藤 尚(2009) モートンイトトンボ. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 動物編. 313. 愛知県環境部自然環境課.
- 村木明雄(2010) トンボの生息環境. 改訂 トンボの調べ方. 132-139. 文教出版.
- 若杉晃介(2012) 圃場整備水田における止水域性トンボの保全とミティゲーション対策に関する基礎的研究. 農村工学研究所報告. (51) : 1-36. 農業・食品産業技術総合研究機構.
- 吉鶴靖則(2016) 愛知県東海市でモートンイトトンボを記録. 佳香蝶. 68 (265) : 13-14. 名古屋昆虫同好会.
- 吉鶴靖則・川田奈穂子・豊田自然調査の会虫めがね(2012) 豊田市自然観察の森および周辺地域のトンボ相. 三河生物. 4 : 1-18. 西三河野生生物研究会.



## 愛知県田原市姫島の昆虫の記録(2016)

浅岡 孝知

愛知県田原市に位置している姫島は、かねてより近くて遠い無人島として知られている。白谷町に属して波瀬区・片浜区の管理私有地となっている。したがって渡島に関しては、区に連絡することになる。しかし、渡島するには地元の漁師さんに頼むことになるので、それは免除されることになる。今回、この姫島に久しぶりの27年ぶりに訪れる機会を得たので、島の様子と昆虫のことを紹介することにした。誘ってくださったのは豊橋市自然史博物館館長の松岡敬二氏で、奥様と渥美半島の地史に造詣の深い田原市の藤城信幸氏と小生の4名で5月4日に出かけてきた。当日は風も強く小舟で大丈夫かなと思われるくらいの天候であった。港からわずか5分あまりの時間であったが、すいすいと渡島することができた。ただし、カッパが必要であった。右に左に舵を切るときに風向きにより波をかぶることとなったのである。また、かつての栈橋は朽ちており跡だけが無残に残っている状態である。従って上陸をするときに足元が濡れることになる。長靴が必需品である。

島の状況は以前とほとんど変わっていないが、山頂の姫島宮まで道が整備されたことに目を引いた。それは平成22・22年度「あいち森と緑づくり税」を活用して整備したことで、車も通られるかと思うばかりの広さの歩道である。しかし、年2回は草刈りをしているらしいが、この時には膝くらいの草に覆われていた。

かつて山頂まで繁茂していたメダケ類はかなり整備され少なくなっている。採集観察は島の周りをグルッと回ることができるので、そのコースと風の影響を受けにくい姫島宮までの山頂コースが適当であると思われる。小生は島一周コースと内部遊歩道の一部を踏査してみた。

姫島の昆虫については、山崎・浅岡(1989)「三河湾・島の昆虫」に詳しく記録されている。コウチュウ目79種、チョウ目13種、その他49種が報告されている。その後、これまで渡島の関係であまり調査が進んでいないのが実情である。早春と限られた時間での調査であり確認した種数は少ないが、今後の参考になればと思う。

以下は得られたり、観察できたりした昆虫の目録である。採集日は全て同じ4-V-2016であるので省いている。なお、種名の前に\*印のあるのは、山崎・浅岡(1989)に載っていない種である。コウチュウ目 COLEOPTERA

- ・オサムシ科 Carabidae

- \*セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* (Schaller, 1783). 1ex.

- ホシハネビロアトキリゴミムシ *Lebia calycophora* Schmidt-Gobel, 1846. 1ex.

- ・コガネムシ科 Scarabaeidae

- ヒラタハナムグリ *Nipponovalgus angusticollis angusticollis* (Waterhouse, 1875). 3exs.

- ハナムグリ *Eucetonia pilifera* (Motschulsky, 1860). 1ex.

- \*コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* (Faldermann, 1835). 2exs.

- ・コメツキムシ科 Elateridae

- ハマベオオヒメサビキコリ *Agrypnus tsukamotoi* (Kishii, 1956). 1ex. 大粒の砂浜と草地の境で僅か一個体を見いだすことができた。個体数は多くないようである。

- アカアシオオクシコメツキ *Melanotus cete* Candeze, 1860. 1ex.

- コガタクシコメツキ *Melanotus erythropygus* Candeze, 1873. 1ex.

- ・テントウムシ科 Coccinellidae

- \*クモガタテントウ *Psyllobora vigintimaculata* (Say, 1824). 1ex. 外来種である。三河湾の島では初めてである。

- ナナホシテントウ *Coccinella septempunctata* Linnaeus, 1758. 2exs.

- ヒメカメノコテントウ *Propylea japonica* (Thunberg, 1781). 1ex.

- ・カミキリムシ科 Cerambycidae

- \*キクスイカミキリ *Phytoecia rufiventris* Gautier, 1870. 3exs. 早春のヨモギの茎に見いだされる.
- ・ハムシ科 Chrysomelidae
  - \*ヨモギハムシ *Chrysolina aurichalcea* (Mannerheim, 1825) 3exs. 全て銅金型であった.
  - \*イモサルハムシ *Colasposoma dauricum* Mannerheim, 1849. 1ex.
  - \*ヒメジンガサハムシ *Cassida fuscorufa* Motschulsky, 1866. 2exs.

#### チョウ目 LEPIDOPTERA

- ・セセリチョウ科 HesperIIDae
  - コチャバネセセリ *Thoressa varia* (Murray, 1875). 1ex.
- ・アゲハチョウ科 Papilionidae
  - \*アオスジアゲハ *Graphium sarpedon nipponum* (Fruhstorfer, 1903). 2exs.
  - \*モンキアゲハ *Papilio helenus nicconicolens* Butler, 1881. 1ex.
- ・シロチョウ科 Pieridae
  - モンシロチョウ *Pieris rapae crucivora* Boisduval, 1836. 2exs.
- ・シジミチョウ科 Lycaenidae
  - ヤマトシジミ *Zizeeria maha argia* (Menetries, 1857). 3exs.

#### カメムシ目 HEMIPTERA

- ・ナガカメムシ科 Lygaeidae
  - ヒメナガカメムシ *Nysius plebejus* Distant, 1883. 2exs.
  - \*ヒメマダラナガカメムシ *Graptostethus servus* (Fabricius, 1787). 1ex. 海浜のハマヒルガオでよく見いだされる種.
  - オオメカメムシ *Piocoris varius* (Uhler, 1860). 1ex.
- ・ヘリカメムシ科 Coreidae
  - ホウズキカメムシ *Acanthocoris sordidus* (Thunberg, 1783). 1ex.
  - ホソハリカメムシ *Cletus punctiger* (Dallas, 1852). 1ex.
- ・マルカメムシ科 Plataspidae
  - マルカメムシ *Megacopta punctatissima* (Montandon, 1894). 1ex.
- ・カメムシ科 Pentatomidae
  - ムラサキシラホシカメムシ *Eysarcoris annamita* Breddin, 1913. 1ex.
  - \*チャバネアオカメムシ *Plautia crossota stali* Scott, 1874. 1ex.
  - エビイロカメムシ *Gonopsis affinis* (Uhler, 1860). 1ex.

僅か3時間ばかりの滞在であったが、蛇紋岩地帯の昆虫を垣間見ることができた。早春は初めてであったがやはり確認種は少ない。季節を変えて訪れてみたいところである。同行して下さった方々に感謝します。



写真1 片浜港から見る姫島



写真2 海浜と姫島宮への登り口

#### 参考文献

山崎隆弘・浅岡孝知(1989)三河湾・島の昆虫. p.27-48. (自刊).

## 岡崎市で採集されたチャイロマメゲンゴロウの記録

市川 靖浩

チャイロマメゲンゴロウ *Agabus regimbarti* Zaitzev (写真1) は体長10~11.5mmのゲンゴロウ科 Dytiscidae の水生甲虫で、国内では本州、四国、九州、国外では中国に分布する(森・北山, 2002)。本種は広島県・高知県・熊本県でレッドリストに選定されている(野生生物調査協会・Envision環境保全事務所, 2007)。愛知県ではリスト外であるが記録が少なく、県下において本種が絶滅の危機に瀕しているかどうかについては不明である。県内の記録は西加茂郡藤岡町(現豊田市藤岡地区)(野中ほか, 1995)、安城市緑町(小鹿, 1997)、豊田市滝脇町(蟹江, 2005)があるのみである。また、未記録ながら豊田市で3箇所、瀬戸市及び蒲郡市の1箇所ずつで各2, 3個体が採集されており、いずれの採集場所も水深がやや深めの池で水が澄んでおり、水生植物が豊富な環境であるとのことである(池竹, 私信)。以上のことから愛知県下ではチャイロマメゲンゴロウの生息場所は局地的で採集個体数も非常に少ないといえる。本種の分布や生息状況、絶滅が危惧されているかどうか検討するためには本種の記録や情報を蓄積していく必要がある。



写真1 チャイロマメゲンゴロウ(スケール1目盛は1mm)

筆者は、本会会長の大平仁夫博士が岡崎市で採集したゲンゴロウ科の中にチャイロマメゲンゴロウと思われる個体が混ざっている旨のご連絡を頂いた。同定の結果、形態的な特徴からチャイロマメゲンゴロウと同定された。本種は岡崎市で未記録であるため、分布の記録としてここに報告する。

本報告について公表を勧めていただいた大平仁夫博士、本種の未記録情報の提供、および公表について快諾いただいた名古屋昆虫同好会幹事・池竹弘旭氏に感謝申し上げます。

#### <採集記録>

1頭、岡崎市阿知和町, 4 - IX - 2016, 大平仁夫採集・保管。

採集場所は、岡崎市阿知和町の工業団地の造成が予定されている区域内の雑木林で、この区域内に池や湿地がある。2016年9月4日にライトトラップによる調査を実施したところ本種が飛来した。飛翔個体のため正確な生息場所については不明であるが、造成予定区域の池もしくは湿地であると推測する。

チャイロマメゲンゴロウと形態的に似る種としてマメゲンゴロウ *Agabus japonicus* Sharp やクロズマメゲンゴロウ *Agabus conspicuus* Sharp がある。前者のマメゲンゴロウは体長が6.5~7.5mmで一回り小さいため同定は容易である。後者のクロズマメゲンゴロウは体形が若干丸く、体高も丸みをおび、前胸背板はほぼ黒く側縁は細い赤褐色の帯となり、上翅は艶が少ないためチャイロマメゲンゴロウとは区別がつく。採集個体の体長は約11mmで、頭部・前胸背板が黒く、前胸背板の両側は幅の広い黄褐色の帯があり、背面は光沢が強い特徴があることからチャイロマメゲンゴロウと同定した。

### 引用文献

- 蟹江 昇 (2005) コウチュウ目Coleoptera. 豊田市自然環境基礎調査報告書 (資料編): 161-236. 豊田市自然環境基礎調査会.
- 森 正人・北山 昭 (2002) 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 231pp. 文一総合出版.
- 野中 勝・野中 充 (1995) 愛知県におけるゲンゴロウ科数種の採集記録. 佳香蝶 (47): 19-20. 名古屋昆虫同好会.
- 小鹿 亨 (1997) チャイロマメゲンゴロウを愛知県下の小学校のプールで採集. 月刊むし, (322): 22.

### 引用サイト

- 野生生物調査協会・Envision環境保全事務所 (2007-) 日本のレッドデータ検索システム. (平成28年11月5日アクセス) <http://www.jpnrdb.com/search.php?mode=map&q=07170111646>

---

## 段戸裏谷でオオシモフリスズメを記録

原田 究

オオシモフリスズメ (*Langia zenzeroides*) は信州伊那谷周辺より西に分布が知られ、豊田市自然観察の森周辺では、全国的に最も多く見られる地域となっている。愛知県では豊田市 (稲武町・東山町・足助町等)・北設楽郡東栄町・豊根村などから記録はあるが段戸裏谷の記録はない。

筆者は本種 1 ♀ を 2016 年 5 月 8 日に段戸裏谷の段戸湖駐車場付近の道路沿いでライトトラップにより採集した。(写真)



2016年5月8日 段戸裏谷産

後日周辺のサクラ・ウメ・モモ・アンズ等のバラ科の葉を観察してみたが、卵・幼虫等は発見できず定着の確認はできなかった。オオシモフリスズメの発生時期としては、ライトトラップを行ったのが遅かったので、来年以降の調査に期待したい。

ご多用にもかかわらず最近の知見をお教え頂き、ご指導下さった大平仁夫先生に感謝申し上げます。

### 参考文献

- 間野隆裕, 2005. オオシモフリスズメの交尾, Rio (2005.4月号), 豊田市矢作川研究所.
- 岸田泰則, 2011. 日本産蛾類標準図鑑 I, 学研.
- 愛知県昆虫分布研究会, 1991. 愛知県の昆虫 下, 愛知県農地林務部自然. 保護課.

## 豊田市における流水性ゲンゴロウ2種の記録

市川 靖浩

豊田市は2005年4月1日に7市町村で合併し、愛知県で最も広い面積を有する市となった。合併に伴い、広大な市域全体の総括的な市史の必要性から「新編豊田市史」の編纂が始まった。分野ごとに取り纏められた市史は順次発刊されている。豊田市における昆虫類の生息状況は「自然編」として刊行予定されているが、刊行に伴う基礎調査により集積された膨大なデータは、市史「自然編」に先立ち「豊田市生物調査報告書」として2016年3月に刊行された。この報告書には8,434種の昆虫が記録されており、愛知県が1990年及び1991年に発行した「愛知県の昆虫」上、及び下の記録種6,063種を大きく上回るものとなっている（豊田市生物調査報告書作成委員会，2016）。一つの市で記録が県記録を大幅に上回るとは他に類を見ないものといえよう。調査に当たられた関係者の方々には心より敬意を表するものである。

「豊田市生物調査報告書」によれば豊田市におけるゲンゴロウ科の記録種は28種である。これまでに愛知県で記録された本科の種数は37種であるので、約7割が豊田市で確認されていることになる。筆者は豊田市内の矢作川水系で新たにゲンゴロウ科2種を採集しているので記録を公表する。これにより豊田市におけるゲンゴロウ科は30種が確認されたことになる。

本報告を執筆するにあたり、名古屋昆虫同好会幹事の池竹弘旭氏に当地域のゲンゴロウ科の生息状況についてご教示いただいた。記して感謝の意を表する。

### 1 キボシケシゲンゴロウ

*Allopachria flavomaculatus* (Kamiya) (写真1)

2頭，豊田市御内町（神越川），24-VII-2016，筆者採集・保管；1頭，豊田市稲武町（井山川），22-VIII-2016，筆者採集・保管；6頭，豊田市大多賀町（段戸川），22-VIII-2016，筆者採集・保管；6頭，豊田市大多賀町（段戸川），23-X-2016，筆者採集・保管。

キボシケシゲンゴロウは体長約2.5mmの流水性種で環境省第4次レッドリストでは情報不足（DD）に選定されている（環境省，2012）。学名には *Nipponhydrus flavomaculatus* (Kamiya) があるが、本報告では「改訂版 図説日本のゲンゴロウ」（森・北山，2002）に従うものとした。

愛知県におけるキボシケシゲンゴロウの記録は尾張地方では犬山市の庄内川水系五条川（佐藤，1990）、三河地方では豊川水系当貝津川（上手・池田，2010）と同水系の境川（市川，2016）にある。豊川水系では宇連川支流の阿寺川でも採集されている（市川，2017）。庄内川や豊川では少ないながら本種の生息は確認されているが、この両水系に挟まる形で流域をもつ矢作川水系では、なぜかこれまで本種は確認さ



写真1 キボシケシゲンゴロウ（生体）



写真2 段戸川の生息環境

れなかった。豊川水系における本種の採集事例をもとに矢作川水系において同様の環境で探索をつづけた結果、豊田市内の神越川・井山川、及び段戸川の3箇所においてキボシケシゲンゴロウが発見された。採集環境は神越川・井山川・段戸川、全て岸側に生えた植物の根際であった(写真2・4)。

## 2 キボシツブゲンゴロウ

*Japanolaccophilus nipponensis* (Kamiya) (写真3)

31頭、豊田市御内町(神越川)、24-VII-2016、筆者採集・保管；8頭、同所、2-X-2016、筆者採集・保管。

キボシツブゲンゴロウは体長3.0~3.2mmの流水性種である。環境省第4次レッドリストでは準絶滅危惧(NT)に選定されている(環境省、2012)。

愛知県におけるキボシツブゲンゴロウの記録は前種と同様に豊川水系当貝津川(上手・池田、2010)と同水系の境川(市川、2016)、さらに市川(2016)では見落とされていた既知記録として豊川水系宇連川(堀ほか、1993)がある。いずれの記録も豊川水系からの記録である。

筆者は、矢作川水系からは初記録となるキボシツブゲンゴロウを前種と同所的に採集した。採集時の状況としては2016年7月24日には岸辺の植物根際(図4)から多数が採集され、Dフレームネットで掬うたびに複数個体が採集されつづけたため保護の観点から途中で採集を中止した。筆者の経験では本種の生息場所は局所的で採集個体が少ないはずだが、この場所はなぜか個体数が非常に多いため驚いたことを記憶している。その後、時期をずらして10月2日にも同所の植物根際を確認したところ本種は採集されたが、個体数は少なかった。



写真3 キボシツブゲンゴロウ (生体)



写真4 神越川の生息環境

## 引用文献

- 堀 ふたば・西本浩之・堀 正和(1993) 鳳来寺山とその周辺の水生昆虫. 鳳来寺山の自然誌, 371-394. 鳳来寺山自然科学博物館.
- 市川靖浩(2016) 設楽ダム貯水予定区域の水生昆虫(2). 三河の昆虫, 63: 853-857.
- 市川靖浩(2017) 宇連川支流阿寺川でキボシケシゲンゴロウを採集. 三河生物 9. 西三河野生生物研究会.
- 上手雄貴・池田都志也(2010) 愛知県におけるキボシツブゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース, 170: 30.
- 環境省(2012) 報道発表資料, 第4次レッドリストの公表について(お知らせ). 添付資料, (別添資料7-5) 昆虫類のレッドリスト(平成26年12月2日アクセス) <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=15619>
- 森 正人・北山 昭(2002) 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 231pp. 文一総合出版.
- 佐藤正孝(1990) 愛知県の甲虫類(I). 愛知県の昆虫(上): 204-231, 愛知県農地林務部自然保護課.
- 豊田市生物調査報告書作成委員会(2016) IX昆虫. 豊田市生物調査報告書<分冊その2>. 379pp, 豊田市環境部環境政策課.

## 知立市産ツマキチョウの一変異型について

大曾根 剛

愛知県西三河地方の平野部におけるツマキチョウ *Anthocharis scolymus* は市街地やその近郊ではほとんど見られず、その分布は中小河川流域の河川敷やその周辺部の農耕作地に少ないながらも広範囲に分布する。

2008年4月19日、筆者は知立市西中町西街道で本種の生息を確認し、2♂♂1♀を採集したが、そのうち1♂1♀が前翅表面基部および中室端の黒色斑が中室上中部を介して繋がる斑紋を持った個体であった(図1・2)。また、翌年の2009年4月21日にも、同地で同じ特徴を持った個体1♂を再度採集した。

このような個体は、松本虫の会ら(1971)での長野県の記録の他に全国各地で散発的な記録があり、古くは野村(1937)によって *ab.umbratilis* なる異常型として命名されているが、県内では吉鶴(2002)の豊明市での記録があるに過ぎない。

筆者は今回採集した1♀より人工採卵を試み、翌年に成虫を羽化させた。採卵では多数の卵を得ることができたが、飼育期間中は筆者が多忙だったことにより、最終的には29蛹しか得ることができなかった。母蝶からの採卵および幼虫の飼育は、コマツナ(アブラナ科)を用いた。成虫は翌2009年3月21日～4月3日に19♂♂10♀♀が羽化した(図3・4)。

そこでこれらの個体の斑紋状態を調査するため、前翅基部より中室端の黒色紋までの長さをa、今回の黒色発現斑の長さをbとして二次元解析ソフトで測定し(図5)、黒色発現斑の到達率を  $b/a \times 100(\%)$  として算出した。また、筆者が所有する近隣他産地の標本n=29(愛知県産n=14、岐阜県産n=2、長野県産n=13)も同様にして測定し、その比較を試みた。

結果としては、今回の飼育個体の黒色発現斑の到達率は64%以上であり、他の産地では36%以下であったことから、今回の知立市西中町産の個体群は前翅中室の黒色斑が大きく発現する傾向が高く、次世代に受け継がれる特徴であることから、異常型ではなく遺伝型と考えられた。また、この傾向は♂よりも♀の方がより顕著であることもわかった(グラフ1)。

## 文献

松本虫の会・諏訪町友会(1971)長野県中部産蝶類の既知異常型目録(第2報). *New Entomol.*, 20(4):1-25.

野村謙一(1937)本邦産蝶類数種の異常型に就いて. *Zephyrus*, 7(2/3):139.

吉鶴靖則(2002)豊明市史, 資料編補7, 自然編第4節, チョウ類: 225-237. 豊明市.

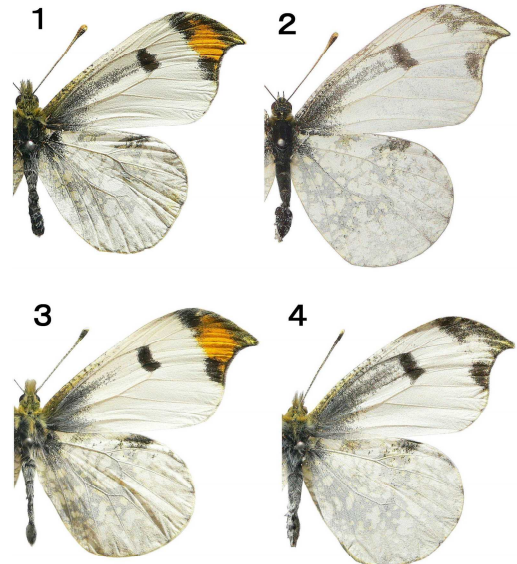


図1・2 知立市西中町西街道産  
図3・4 同地産♀より採卵, 飼育羽化した個体

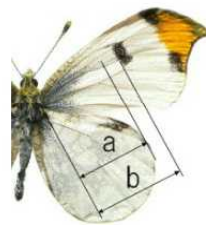
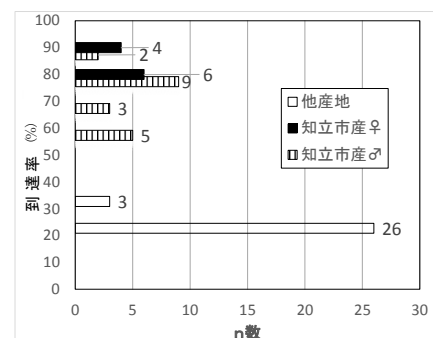


図5 測定場所



グラフ1 前翅黒色斑の到達率

## 奥三河のヤマキマダラヒカゲ

白井 和伸

ヤマキマダラヒカゲ *Neope niphonica* の採集記録は愛知県では少ない。もともと分布域が限られているところに調査不足が加わって、一層記録が乏しくなっていると考えられる。手元の資料によれば、旧町村名で記すと、設楽町・稲武町・津具村・豊根村から記録されている。

筆者は次のとおり奥三河で採集しているので、前記4町村の区域内ではあるが、記録集積のため報告する。

## 1 豊根村 豊富林道 (標高約 1000m)

林道起点から 17.5km ポストまで、ササは連続して見られる。

24-VI-2009 3km ポスト付近, 1 ♂, 9km ポスト付近, 2 ♂♂

24-V-2014 3km ポスト付近, 1 ♂, 9km ポスト付近 1 ♂

## 2 豊根村 宝地峠と林道霧坂線 (標高約 960m)

林道入口から約 3km まで。ササは連続して見られる。

24-V-2013 林道霧坂線, 2 ♂♂, 宝地峠付近, 1 ♂

23-VIII-2015 宝地峠付近, 1 ♂(夏型)

## 3 豊根村 林道茶臼山線 (標高約 1160m)

自動車を通り抜けた。ササは連続して見られる。

24-V-2016 4km ポスト付近, 1 ♂

## 4 設楽町 碁盤石山(標高 1189.4m)とその周辺 (標高は天狗の庭が約 1040m, 南のピークが約 1180m)

登山口から頂上まで広くササに覆われている。

27-V-2015 登山口～天狗の庭, 1 ♀, 天狗の庭～南のピーク, 1 ♂

## 5 設楽町 林道丸山線 (標高 1040m 付近)

ササは連続して見られるが、前半は丈が高い種類。標高が上がると股下程度と低くなり、そのような場所に見られた。

29-V-2016 林道終点付近, 1 ♂

21-VIII-2016 林道終点付近, 2 ♂♂(夏型)

## 6 設楽町 町道東山箱淵線 (標高約 940m)

ササは連続して見られる。

29-V-2016 長野県境付近, 1 ♂

## 7 豊田市(旧稲武町) 仏庫裡(これでも標高 1071.9m の山の名前であり、「ぶくり」と読む。)とその周辺

登山口から頂上まで広くササに覆われている。

1-VI-2014 仏庫裡頂上付近, 1 ♂, 仏庫裡北西約 1km(林道段戸 208 号沿), 1 ♀

23-VIII-2015 仏庫裡頂上付近, 1 ♀(夏型)

## 8 豊田市(旧稲武町) 林道野入・月ヶ平線 (標高約 900m)

ササは連続して見られる。

24-V-2016 野外教育センター付近, 1 ♂



写真1 第1化成熟虫 24-V-2014 林道丸山線



写真2 夏型成熟虫 21-VIII-2016 林道丸山線



## 岐阜県高山市高根町日和田で採集した昆虫

原田 究

筆者は高山市高根町で以下の昆虫を採集しているので、記録として報告する。

1 オオシロシタバ *Catocala lara* 写真1

北海道には多産するが、本州では比較的少なく近畿地方以西では散発的な記録しかない。7月下旬から10月上旬まで出現し、幼虫の寄主植物はシナノキ属である。

筆者は本種 1ex. を 2016年8月31日に高山市高根町日和田の標高1580m 辺りの道路沿いで、ライトトラップにより採集・観察している。写真1に示した標本はすれが多いが、すれがない別個体を目撃したが、車に引かれたために標本にしなかった。

本種はかなり遠方まで飛翔することが知られているが、複数の個体があったことから、採集地周辺で発生した可能性が高い。

高山市高根町は、野麦野麦峠の記録がある。



写真1 2016年8月31日 日和田産

2 オニベニシタバ *Catocala dura* 写真2

北海道から近畿地方まで内陸にかなり普通に産し、6月中旬から出現し10月下旬まで見られる。幼虫の寄主植物はブナ科植物。

筆者は本種を 2016年8月4日に岐阜県高山市高根町日和田の標高1580m あたりの道路沿いでライトトラップにより採集した。他の採集地と同様、1晩で10頭近くが飛来した。

高山市高根町の記録は、上ヶ洞の記録が見られる。

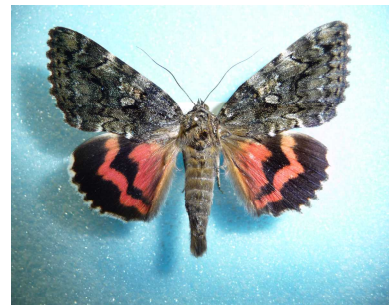


写真2 2016年8月4日 日和田産

3 ミヤマダイコクコガネ *Copris pecuarius* 写真3

東北から九州までの高原に分布し、林内の獣糞を好むが放牧地から見つかることも多い。8月から9月にかけて個体数を増やす。

筆者は本種 1 匹を、2016年7月18日に岐阜県高山市高根町日和田の標高1080m 辺りの高根乗鞍湖上流付近でライトトラップにより採集したので報告する。周辺には牧場はないので、野生獣の糞に依存している個体と思われる。

高山市高根町千間樽の標高1500m 付近から記録がある。



写真3 2016年7月18日 日和田産

## 参考文献

- 井上寛・ほか, 1982. 日本産蛾類大図鑑, 講談社.  
 岸田泰則, 2011. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ, 学研.  
 岐阜県昆虫分布研究会, 2014. 岐阜県昆虫目録Ⅱ, 667pp.  
 岐阜県昆虫分布研究会, 2015. 岐阜県昆虫目録Ⅲ, 786pp.  
 川井信矢・ほか, 2005. 日本産コガネムシ上科図説Ⅰ食糞群, 189pp. 昆虫文献六本脚.

## 中部大学蝶類研究資料館

大場 裕一

### はじめに

蝶類研究資料館は、中部大学が藤岡知夫氏（1935～）の所有する日本産蝶類の乾燥標本コレクション（以下、藤岡コレクション）を譲り受け、2016年8月にオープンした施設である。中部大学のメインキャンパスは春日井市にあるが、蝶類研究資料館は一般来館者の利便を考慮して鶴舞にある名古屋キャンパス（写真1）に置かれている。その設置目的は、藤岡コレクションを学術研究のために保管するとともに、研究成果の公開を通じた市民の学びの場を提供することにある。施設は、温度と湿度が管理された標本保管庫（写真2）と、文献資料のための書架や研究用の実体顕微鏡を置く作業室、公開のための展示室（写真3）の3つに分かれている。

本資料館のオープンについては、新聞やテレビのニュースなどでも紹介されたので、既にその存在を知っている方もあるかもしれないが、著者（大場）は、2016年4月から中部大学に着任する少し前から本資料館の準備に関わってきたので、その内部の立場から改めて資料館の設立経緯や意義を紹介させていただきたい。

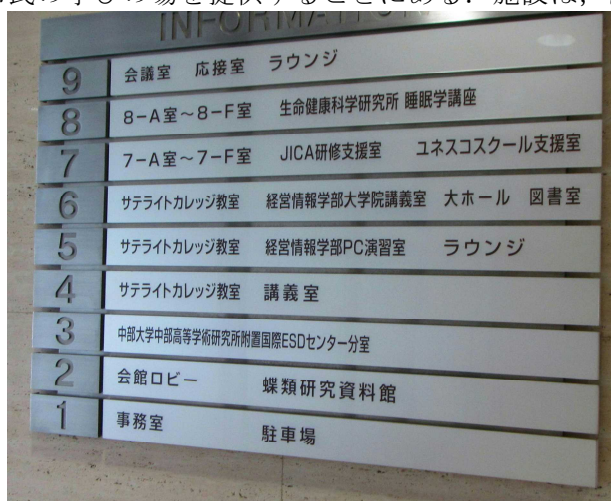


写真1 中部大学名古屋キャンパス・ロビーの表示  
蝶類研究資料館は2階

### 藤岡コレクションと寄贈の経緯

中部大学が譲り受けるのは、藤岡氏がその半生をかけて収集された日本産蝶類の乾燥標本のすべて—その数はドイツ箱にして1,700箱、個体数では推定22万頭にも及ぶもので、蝶の愛好家の間ではこのコレクションの存在を知らない人はいないほどのビッグコレクションである。参考までに、国立科学博物館が所有する鱗翅目（蛾を含む）の標本数は、およそ17万頭とのこと。すでに470箱が中部大に移管されているが、残りの標本箱については、藤岡氏が代表取締役を務める日本蝶類研究所株式会社で標本を整理しつつ、5年間をかけて少しずつ移される計画になっている。

ちなみに、藤岡コレクションが中部大学に寄贈されたのは、中部大学の飯吉厚夫理事長と藤岡知夫氏が慶應義塾大学時代の学友だったことが縁だったと聞いている。なお、藤岡氏の専門はレーザー光学で、飯吉氏の専門は核融合科学



写真2 標本保管庫

である。ただし、山下興亜学長は昆虫学者であることから昆虫標本を保存することの重要性に対して深い理解があるものの、現在中部大学には蝶の分類を専門とする昆虫学者がおらず、また資料館には専任の学芸員もいない。標本を長く保存し研究に活用するためにも、さらに、企画展示や研究成果の発信のためにも、運営委員会では今後こうした問題点を解決していかなくてはならない。

### 藤岡コレクションの意義

藤岡コレクションが研究資料として優れた価値を持つ理由は、その突出した標本の量と質の大きさにある。

まず、22万頭という数字がそもそも桁外れであるが、これらには日本産の蝶の全種・全亜種が含まれ、さらに各種の地域個体群をほぼカバーしているというから驚きである。たとえば、ギフチョウだけでも約1万頭、ぎっしり詰まったドイツ箱に97箱もあるという。

さらに、そのすべての標本に対し必要な情報が記された正確なラベルが付されていることは特筆に値する。しかも、藤岡コレクションの内容は「藤岡知夫蝶類コレクションリスト」として標本写真とラベル情報を揃えて書籍として出版され続けている。

最後に、標本の保存状態が良いことがコレクションの優れた点として挙げられる。昆虫標本は、一度でも保存管理を怠ると虫に食われたり変色したりして、資料的価値が激減する。その点、藤岡コレクションを見ると、いかにこのコレクションが大切に管理されてきたのかがよくわかる。

中部大学では、すべての標本情報をGIS（地理情報システム）を含めたデータベースに移して、データ検索や網羅的解析が可能なシステムに構築する作業も進めている。将来的には中部大学国際GISセンターと協力して、すべての標本個体について鱗粉ひとつひとつが判別できる精度で撮影し、デジタルアーカイブ化することも検討中である。

### 蝶類研究資料館の今後

冒頭にも述べたように、藤岡コレクションの中部大学への移管は5年間をかけて行われるため、標本すべてが蝶類研究資料館に揃うのは5年後ということになる。また、現在は学芸員がいないので、来館した研究者に標本を閲覧させる体制ができていない。展示室での一般公開は今のところ夏休みの限られた期間のみの予定である。

しかし、このような制限があるとはいえ、藤岡コレクションが責任を持って管理する日本の公教育機関に収まることになったことは、日本の研究者にとって幸いなことである。さらに、国際的なESD（持続可能な開発のための教育）プログラムの中部拠点にもなっている中部大学にとっても、藤岡コレクションを所有していることは重要なアイコンとなると思われる。将来的には、この藤岡コレクションを土台にして、さまざまな生物標本を保存し研究を行う自然史施設として発展させる計画も上がっている。今後の展開に期待していただきたい。



写真3 公開用の展示室

## 岡崎市でルイスホソカタムシを採集

金田 吉高

愛知県内のルイスホソカタムシ *Gempylodes ornamentalis* Reitter (写真) の記録は、少ないが近年カシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* (Murayama) によるコナラなどの加害木「ナラ枯れ」が急速に拡大されると共にキクイムシ類を捕食する本種も各地で増加傾向を示している。

岡崎市では、未記録であった本種を筆者は採集することができたので報告しておきたい。

5exs, 愛知県岡崎市奥山田町村積山, 23.VI.2013, 筆者採集保管。

夕刻, 遊歩道沿いにあったカシノナガキクイムシの加害によって枯れたコナラの大木から得られた。樹皮には無数のキクイムシ類の坑道があり本種は出入りするために幹を徘徊していた。

文末ながら、本稿を草するにあたりご教示いただいた戸田尚希、同行していただいた乙部宏、城殿浩の各氏に厚くお礼申し上げます。



写真 岡崎市奥山田町村積山産

### 参考文献

黒澤良彦他 (1985), 原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ), p.294

河路掛吾 (2012), ルイスホソカタムシの追加記録, 佳香蝶 64 (250) :p.34. 名古屋昆虫同好会.

蟹江昇 (2013), 豊田市で採集された興味ある甲虫, 三河の昆虫 (60) :p. 797. 三河昆虫研究会.

河路掛吾 (2013), ルイスホソカタムシの記録報告 (2012 年), 佳香蝶 65 (253) :p.14, 65 (256) :p.50 名古屋昆虫同好会.

戸田尚希・他 (2014), 名古屋市で新たに得られた甲虫, 佳香蝶 66 (259) :p.63-p.64 名古屋昆虫同好会.

河路掛吾 (2015), 愛知県内で採集したホソカタムシ類, 佳香蝶 67 (261) :p.01-p.03 名古屋昆虫同好会.

## 2015年度 三河昆虫研究会総会

2016年3月, 三河昆虫研究会の総会が例年のように, 岡崎市竜美丘会館で行われました。

毎年のように, 講演・会員各自の近況報告等が行われましたが, それに先だって, 会長の大平先生から, 研究会の今後について議題が示され, 話し合いの結果として以下のことが決まりました。

- ・会長は大平先生に引き続きお願いすること。
  - ・会誌の編集・印刷方法を変更することで, 投稿の便利さや経費節減・編集の省力化を図る。
  - ・メーリングリスト整備や会誌発送方法変更することで, 連絡の円滑化や経費の節減を図っていく。
  - ・次回から総会を系列の西三河野生生物研究会と合同で行うこと。
- 新しい研究会の体制にご理解・ご協力をお願いいたします。



2015年度の総会 (写真提供 山本様)